

池窪弘務作品集3 ラジオドラマ

[ホームに戻る](#)

目次 リンクをクリックして下さい。

[作品1](#) 一人で跳べる

1994-01-08 (FMシアター)

[作品2](#) バスが行く

1995-09-30 (FMシアター)

[作品3](#) 窓

1999-11-13 (FMシアター)

[作品4](#) 突然ジークのように

作品1 一人で跳べる [目次へ](#)

登場人物

葉山一郎（47） 薬品会社社員（営業）

山崎 正（47） 会社社長

鈴木道子（25） 看護婦

葉山裕子（45） 一郎の妻

岡 洋介（50） 薬品会社社員（倉庫係）

バー「愛」のママ（35）

バー「愛」の客 A、B、C

(テレビゲーム(テトリス)の音。間があって、
少し遠くで電話のベル)

葉山「今頃誰かなあ」

妻「お願い出て、今、私大変なんだから。さあ、
あとブロッカー一列」

(テレビゲームの音が遠のき、電話のベルが大き
くなる。受話器を取る)

葉山「葉山です」

前田「俺だよ、前田。ご無沙汰だね。どうしてい
る？」

葉山「ああ、どうにか生きているよ」

前田「一度会いたいね。五年前のOB戦以来会って
いない」

葉山「そうだね……」

前田「(間)どうしようかと、随分迷ったん だが
……」

葉山「……」

前田「実は山崎の事なんだ」

葉山「山崎？」

前田「やはり知らなかったか。何故かそんな気がしたんだ。俺にはあまりいい思い出はないけれど、葉山、お前は、仲がよかつたろう」

葉山「うん、だが、卒業以来殆ど会っていない」

前田「そうか、学生時代はいつも一緒にいたのになあ」

葉山「そんなもんさ。それで、山崎がどうした？」

前田「言い出したら、口に蓋出来ないもんなあ。あいつ、入院している。それも、かなり悪いらしい」

葉山「山崎が……」

前田「あんたに連絡したことは誰にも言わない。知らずにいた方が、お互いに幸せだという事もあるし」

葉山「いや、気にすることはないよ。それで、病院は？」

前田「青山大付属病院、第二内科だ。病室は聞いてない。俺も偶然知ったんだ」

葉山「俺、毎日、あの病院の前を通っているよ」

前田「そう言えば、あんたの会社のすぐそばだったなあ」

葉山「行ってみるよ」

前田「知らせておいて変だが、止めたほうがいいかもしれない。俺達、五十にまだ間があるだろう」

葉山「成人病で、十分死ねる年だよ」

前田「俺も近頃、自分が年寄りなのか若いのか、分からなくなる。日曜日の、夜遅くに悪かった。自分が行きもしないのに、おせつかいだった」

葉山「そんなことはない。有り難う」

前田「そのうち飲みに行こう」

葉山「ああ」

前田「そうか、この前も同じ事を言ってたっけ。じゃあ」

(暫くこちらの様子を伺うような沈黙の後、相手の電話は切れる。そして、少し間があり、葉山が受話器を置く音。居間のテレビゲームの音が少しずつ大きくなる)

妻「誰から？」

葉山「前田」

妻「珍しいわね」

葉山「山崎が入院しているって」

妻「山崎さんって、あの山崎さん？」

葉山「そう、俺達の出世頭、若きベンチャー　ビジ

ネスの旗手」

妻「しばらく、テレビで見かけないと思った　ら」

葉山「あつ、そのブロック崩れないよ」

(ゲームオーバーの音)

葉山「あーあ、もう少しだったのに」

妻「それで、病気は何？」

葉山「聞いていない。かなり悪いらしい。でも、電
話は嫌だよ。なんの前触れもなしに、突然別の世界
が飛び込んで来る」

妻「仕方ないわ、見えない所で、いつもほかの世界
が同時進行しているんだから」

葉山「ほかの世界でも、子供が寝静まった後、かみ

さんがテレビゲームをして、旦那がビール飲みながら、それをポケットと見ているのかなあ」

妻「つまらない？」

葉山「いいや、俺は見ているのが好きだから」

妻「不思議ね」

葉山「何が？」

妻「偶然といってもいいか。今日、私、面白い詩を読んだの。聞きたい？」

葉山「いいや、別に」

妻「自分の葬式を半分すませたようなものさ

青春の友が一人

また一人土にかえって行くのは」

葉山「まだ、死んじやいないよ」

妻「田村隆一の主語という詩なの」

妻「(間) そんな歳になったのね。でも、結局は、自分に起こったことしか、分からないのよ」

(蚊の飛ぶ音。蚊を両手でぴしやりと

叩く)

妻「とれた？」

葉山「ああ」

妻「一瞬の死ね」

葉山「掌を擦りあわせれば、たちまち消えてしまう。蚊に生きているという自覚あるのかなあ？ 自分に起こった事も分からないまま、俺の掌の中で消えてしまった」

妻「はかないものね」

葉山「俺達もおなじ様なもんかもしれない。（間）

山崎か……。突然俺の生活に現れるなんて……。二十五年も会わずに友達といえるかどうか。今更会っても、何も話す事がないかもしれない」

妻「私には、三十年も会わない友達がいるわ。これからも多分話し合うこともないと思う。会うすべもないし、生きているのか死んでいるのかも分からない。でも、心の中で問いかけると、いつも昔と同じまんまで応えてくれるの」

（北川薬品営業部。終業時の職場のざ わめ

き）

女子社員「お先に失礼します」

葉山「ああ、お疲れさん。あ、岡さん」

岡「やあ、今日は済まなかった。倉庫の配送ミスを背負わせたりして。それに、先方に謝りに行ってくれたんだって」

葉山「気にすることないよ。営業の仕事だから」

岡「今晚はおごるよ」

葉山「今夜、見舞いに行かなきゃならないんだ」

岡「誰の？」

葉山「大学の友達」

岡「病院は？」

葉山「青山大付属病院」

岡「あそこなら、通り道だ。一緒に帰ろう」

岡「（立ち去りながら）愛のママの処もパス？」

葉山「（声を少し大きくして）早く終われば、あとから行くよ」

（自動車の音。歩道を歩く音）

葉山「ビルの谷間に、釣瓶落しに、まさしくオレン
ジ色のでっかい夕日が落ちて行く」

岡「ほんとにでっかい太陽だなあ」

葉山「岡さんの顔みたいだ」

岡「うん、輝いている」

葉山「でも、後は沈むだけ」

岡「そうですね、どっちみち俺はでっかい顔の夕日
だよ。でもなあ、あのほかでかい太陽が見れるのは、
帰る時間と日没が一致する短い間だけだよ」

葉山「殆ど空なんか見ないもんね」

岡「奥さん元気」

葉山「うん、相変わらず訳の分からないことを言っ
ているよ」

岡「少し変わってるぐらいの方が飽きなくていいよ。
うちのなんか全然ダメ。野菜が高いの、玉子が安い
のそんなのばっかり。この前、お宅に寄せてもらっ
た時、冷酒にもみじの一葉がさりげなく浮かべてあ
った。風流だよなあ」

二人、肩を並べて黙って歩く。

岡「おい」

葉山「ああ、びっくりした。急に大きな声を出すなよ。一体どうしたの？」

岡「（間）吐く息が今年初めて白くなった」

しばらくして、立ち止まる。

岡「ここだよ、まるでホテルだ」

葉山「十八階だって。知らない人は、病院だなんて思いもしないだろう」

岡「長いスロープの向こうが正面玄関」

葉山「このまま、通り過ぎようか。明日も分からない友達に、わざわざ古い時間を、見舞いがてら下げて行く事なんかないんだ。薄情だと思う？」

岡「いいや、あんたの問題だから、どうこう言えないけど……。俺は単純に病気の友達を見舞えばいいと思うけど」

葉山「岡さん、本当は、怖いんだ」

岡「怖い……」

葉山「あいつ死ぬかもしれない。どんな顔をして会いに行ったらいいのか、何を話したらいいのか、分からない……」

岡「……」

葉山「それに、あいつ、本当に俺に会いたいだろうか？現在の姿を見られるのが嫌だって思わないだろうか？」

岡「……。いつもの処で待っているよ」

葉山「岡さん……。振り返りもせずに行っちゃった。仕方ない、俺の事なんだから。（ふっと吐息を）今年初めて、息が白くなったか」

（短い間。葉山の足音だけが続く。そして、止まる。自動ドアが開く。再び、葉山の足音。遠くの方で聞こえていた救急車の音が次第に近づいてきて、ふっと、止む。足音が止まる。

葉山「ええっと、第二内科はA病棟か」

(葉山歩き出す、しばらくあつて)

葉山「(通りかかった看護婦に) あっ、看護婦さんちよつと済みません」

看護婦(鈴木道子)「(オフから近づく) はい」

葉山「A病棟に行きたいんですが」

道子「わたしも戻りますから一緒にどうぞ」

葉山「あんまり広いのでキョロキョロしているうちに、迷ってしまつて」

道子「外来の診察が終わると照明を落としますから」

葉山「それに、方向音痴なもので」

道子「わたしも時々迷うんですよ。(笑い)」

葉山「ホテルのような広いロビー、病院っていうイメージがわからない。それに、静かですね。医師を呼ぶ、放送なんかもない」

道子「みんなポケットベルを持っていますからそれで呼び出します。病院自体がシステムなんですつて」

葉山「屋上には、ヘリポートがあるって？」

道子「ええ」

葉山「すごいなあ、最先端医療だ」

(エレベーターの扉の開く音。乗り込む 二人)

道子「階は？」

葉山「十八階」

道子「同じですわ」

葉山「山崎という患者、御存じですか？」

道子「はい」

葉山「……。 (間) 会えますか？」

道子「はい」

葉山「面会出来ないんじゃないかと、心配して

たんで……」

道子「一番奥のお部屋です」

葉山「個室ですか？」

道子「ええ、特別室です」

葉山「特別室……」

(間)

葉山「長いですね。ゆっくりと、十八階まで、ノン

ストップ」

(エレベーターの止まる音、ドアの開く音)

道子「この廊下の一番奥ですから」

葉山「ありがとう」

(葉山の足音が止まる。数秒の間。そして、

ドアをノックする音)

山崎「(病室の中から)はい」

(ドアを開ける音)

葉山「山崎……。俺だよ」

山崎「葉山か、信じられない(長い間)」

山崎「本当に葉山だ」

葉山「久しぶりだ」

山崎「お前が来てくれるなんて思いもしなかった」

葉山「迷惑だった？」

山崎「とんでもない。嬉しいよ、夢みたいだ。涙が出そうだよ」

葉山「……。変わったろう。頭が真っ白になった」

山崎「いいや、何にも変わっていない。昔のままだよ」

葉山「俺の会社この近く、病院は会社からの帰り道なんだ」

山崎「そうか、知らなかった」

葉山「前田から聞いたんだ」

山崎「前田？」

葉山「剣道部の主将だった奴だ。俺が副将をやっていた」

山崎「剣道部の主将……？。思い出せない。そういえば、同じ名前の医者がいるよ。息子かなあ。年が合わないか。看護婦にもいたような気がする。まあ、千人を超える患者と、ほぼ同数の職員がいるのだから、俺とお前を結びつける人間がいても不思議ではないか」

葉山「それに、君は有名人だ」

山崎「有名人か。そんな時もあった」

葉山「いい部屋じゃないか」

山崎「いい部屋、でも、ここは病室だよ」

葉山「俺、応接セットのある病室なんて初めてだよ」

山崎「ホームバーがあればもっといい。コーヒーでも入れよう」

葉山「まさか、病人にそんなことをさせちや悪いよ」

山崎「その冷蔵庫に缶コーヒーがある。取ってくれないか」

葉山「いいよ、かまわないでくれ」

山崎「遠慮するなよ。俺も飲みたいんだ」

葉山「よそんちの冷蔵庫を開けるのがいやなんだ」

山崎「（笑い）変わらないな、俺の下宿に来

て、そんなことを言ったことがあった。じゃ、俺が取ろう」

葉山「いいや、俺が取るよ」

（葉山、冷蔵庫に近づき開ける）

葉山「2種類ある。どっちだ」

山崎「どちらでもいい」

(冷蔵庫を閉める)

山崎「ありがとう。まあ、座れよ、座って話そう」

葉山「元気そうじゃないか」

山崎「元気そうか。俺はもう、この部屋以外の世界を失っているんだよ。だれも面と向かって言わないけど、癌だと思う。別に特別な病気じゃないんだ。石を投げればあたるほど平凡な病気さ。運が良けりゃ生き延びられるし、悪けりゃ死ぬ。幸運にも、俺は鎮痛剤が良く効いている。だから、あまり辛くないんだ」

葉山「良かったよ。俺は何本ものチューブにつながれているのかと思った」

山崎「それを見てざまーみろって、笑うつもりだったのか」

葉山「そうだよ、だけど、まだまだ憎まれっ子、世にはばかりそうだ」

山崎「卒業して一度も会わなかった。何故だろう」

葉山「あ、何故だろうね」

山崎「だが、今日、会えてよかった。思い出に浸る
為じゃなく、これから生きて行くためにも」

葉山「不思議だなあ、お前の顔を見た瞬間、何も知
らないのに、お前の二十五年の人生が、俺の人生の
中に含まれているような気がふつとした」

山崎「同じように生きてきたんだよ、きっと。こう
して話していると、二十五年の空白が溶けて行くよ
うな気がする。色んな出来事があったけど、結局俺
達の間は何も変わっていない。思い出したよ。うん、
前田って剣道部のキャプテンだ」

葉山「そう、二年生の時、お前は一人で正門を封鎖
した。その時、真剣片手に飛んで行った男だよ」

山崎「斬られるかと思った」

葉山「まるで時代劇だよなあ。あいつ、高倉健にい
かれていた」

山崎「止めてくれたのがお前。だが、なぜあの場に
突然現れたんだ」

葉山「だってさ、これから、過激派を斬りに行くっ

て、わざわざ言いに来るんだもん。止めなきや悪いよ（笑い）」

山崎「その彼が知らせてくれたか……。妙な巡り合わせだね」

葉山「うん」

山崎「あの時、俺は大学中逃げ回ったよ」

葉山「あれが出会いだった」

山崎「あんなことでもなけりゃ、学部も違ったし、マンモス大学の中で出会うこともなかったよなあ」

葉山「それから、学食で隣の席に座るようになり……」

山崎「不思議と気が会うようになった。お前は、友達に囲まれていたけれど、俺はそうじゃなかった。

まあ、友達がいれば、一人で正門を封鎖する事もなかっただろうけど」

葉山「俺は感心したよ。俺には、絶対出来ない事をする奴だって」

山崎「四年生の時、不正入試の発覚がきっかけで、学生が立ち上がった」

葉山「そして、お前はその先頭に立った。俺はお前

たちが、熱くなるほど、逆に冷めていった。我々という言葉が嫌いだった」

山崎「あの時お前はやめろと言った。そんな事をしても何も変わらないと。遠巻きで見ているノンポリの学生の中から、お前は、たった一人でやって来てそう言った」

葉山「不正入試を糺すこと、それが目的だった筈だ。お前のやっているのは政治運動だと、確かそう言った」

山崎「あの頃、俺はいずれ、軍隊が出て来ると信じていた。権力がその素顔を現すのを待っていた。今も、眠れない夜、窓の下の明かりが次々に落ち、深い暗黒の海になる頃、ビルを押し倒して、あの時、とうとうやって来なかった戦車がやって来る。だが、今はそれは権力ではない。俺の運命みたいなものだ。よ。葉山、窓の外には色々のものが現れるんだ。太陽だって、きっちり、ビルの向こうに沈むんだ」

葉山「お前は、戦車を待っていたのか？」

山崎「ああ、何かとてつもないものがやって来ると思っていた。俺はそれに潰されて死ぬ。その後、市

民が立ち上がる。だが、やってきたのは警官だった。市民だった。何故俺達は、警官と戦わなくてはならなかったか。市民と戦わなくてはならなかったか、今でも分からない」

葉山「あの時、自衛隊が出て来ていたら、多くの死者が出ていた」

山崎「慈悲だというのか？」

葉山「そう思ってもいいのじゃないか。俺達の戦いは、選択することが出来た。それが、俺達の親の世代と決定的に違っているところだよ」

山崎「そうかもしれない。仲間達は、全て、俺の指示に従ったと言った。そして、髪を切り、きれいなワイシャツを着て、ネクタイをしっかりと結んだ。今は、綺麗な家族に囲まれて、あの時が俺達の青春だったと言う」

葉山「俺も、その中の一人だよ」

山崎「いや、お前は違う。塔に上がって来た時、取り囲まれ、裏切り者と罵倒されても平然としていた」

葉山「いや、足ががくがくしていたんだよ。ただあ

の時、俺がなすべき事は、一つしかなかった。お前に会うこと。今日と同じだよ。ただ……」

山崎「ただ……」

葉山「今日は迷った」

山崎「迷った……。死に直面している、俺を見るのが怖かった。辛かった」

葉山「そんなんじゃないよ。俺は、お前が元気そうなので、ほっとしているんだ」

山崎「いいんだよ、葉山、今、お前は俺の前 にいるんだから」

山崎「話題を変えよう。難しい話は止めて、一つ楽しい話が聞きたい」

葉山「楽しい話か、悲しい話か分からないけど」

山崎「それでいいよ」

葉山「お前達の最後の砦が落ちた日、水浸しになった教室で、泣き叫んでいる女学生を見た。あんなに泣けるのが不思議なくらい大声をあげて泣いていた。

暫くして、俺の気配に気付いて彼女は振り向いた。

俺は、にこっと笑って何気なく言ったんだ。いまなすべき事は、大声で、天皇陛下万歳って叫ぶ事だよ

って。女学生は真っ白い歯を出して笑った。そうして、太宰治ねって言ったんだ。俺は何のことか分からず、それでも頷いていた」

妻（インサート）「太宰治はこう書いている

わ。日本に於いて今さら昨日の軍閥官僚を罵倒してみたって、それはもう自由思想ではない。それこそ真空管の中の鳩である。眞の勇氣ある自由思想家なら、いまこそ何を措いても叫ばなければならぬ事がある。

天皇陛下萬歳！

この叫びだ。

昨日までは古かった。古いどころか詐欺だった。しかし、今日に於いては最も新しい自由思想だ。たしかに、彼の言うように戦争は、何もかも変えてしまったと思う。でも、私たちの戦争は、何も変えなかった。私たちは、一体、何のため戦ったの？」

山崎「何のために……」

葉山「彼女は、又、半ベそをかきながら、両手をあげて、天皇陛下万歳」

山崎「その娘とそれからどうなった？」

葉山「以来、ずっと付き合っている。家に帰ったら、今でも居るよ。昨日も、俺に、主語という詩を読んでもくれたよ」

山崎「主語、どんな詩だ」

葉山「（言葉に詰まる）いや、聞いた途端に忘れたよ」

山崎「ところで、子供は」

葉山「女ばかり三人」

山崎「凄いいじゃないか」

葉山「凄いか？」

山崎「自分の子供ってどんな感じだ？」

葉山「俺と同じ遺伝子を持っている人間がいる。不思議な気がするよ。分身のように思うこともある。しかし、やはり、俺じゃない」

山崎「会社は、北川薬品だったけ。変わらずだよな」

葉山「ほかに行く所がないんだ。出世コースからも遠く離れちゃった。管理職にもなれずにうろろしているよ」

山崎「出世なんてしない方がいい。命を縮めている

ようなもんだ。お前は幸せなんだよ。それに気付いていないだけなんだ」

葉山「二十五年も会わず、勝手に、他人の人生を断定するなよ。お前のことも聞かせてくれないか」

山崎「結婚はしなかった」

(ノックの音)

山崎「はい」

(ドアを開け道子が入って来る)

道子「失礼します。山崎さん。検温の時間です」

葉山「あっ」

山崎「何だ、知っているのか？」

葉山「病院で、迷子になってたんだ。それで、看護婦さんが水先案内人に」

道子「(山崎に向かって)痛みますか？」

山崎「いいや、大丈夫。友達が尋ねてくれたんでね。痛みも忘れてしまう」

道子「それじゃ、お話の邪魔をしないうちに」

山崎「いや、邪魔だなんて」

(道子が遠ざかり、ドアが静かに閉まる)

山崎「彼女をエレベーターの中で独り占めしたのか？」

葉山「独り占め？」

山崎「どうした、なぜ外ばかり見ている。彼女はもう、出て行ったよ」

葉山「夜景があまりに素晴らしいんでね」

山崎「美しいだろう」

葉山「ああ、まるで闇と光のダンスだ」

山崎「一度、バシッと、数分光が消えたことがあった。窓の下は闇だったよ、底知れぬ闇だったよ。光があれば、必ず闇がある」

葉山「あの光の下に何人の人間が生きているのだろう。想像もつかない。人の数だけ人生があるんだよなあ」

山崎「俺とは、もう無縁な世界だよ。何のかわりもない人間が生きていて」

葉山「そうかなあ、俺は何処かで繋がっているような気がする。うまく言えないけど、多分」

山崎「そうか、そうなんだ」

葉山「（笑い）自分で何を納得しているんだ」

山崎「無縁じゃないようなあ。あの光の海から、お前が上がって来てくれたんだから」

葉山「あそこにいるんだよ、俺。……」

山崎「だが、人は誰の人生とも替われないし、誰も自分の人生と替わってくれない。本当に、運命とは残酷なもんだよ。自分に起こって、初めて分かる。

それまでは、何もかもが、所詮ひとつとなんだ」

葉山「泣き言をいうなよ」

山崎「（吹き出す）お前って、いつもそうだったよなあ。哀れに思わないのか」

葉山「思わないね。素晴らしい部屋と、素晴らしい夜景、替わってやりたいよ。それに、お前は悲観しているけれど、病気は治るよ。あの時は、あんなことを言ってたなって、笑い話になるよ。何しろ最先

端医療を受けているのだから」

山崎「……少しだけ窓を開けて、風を入れてくれな
いか」

（窓が少し開く。風の音）

山崎「その出窓に、つい三日前までカトレアがあ
ったんだ。今まで、花の名前も知らないし、興味も
なかった。花をじっくり眺めたことなんてなかった。
ところが、鉢植えは、病気が根付くと言って、病室
には相応しくないらしい。それで、会社の女の子が
持って行ってしまったんだ。窓が寂しくなった。

（気を取り直したように）彼女をどう思う？」

葉山「彼女？」

山崎「今、僕達に共通の女性は一人だけだろうが」

葉山「（吹き出す）僕達……、ああ、あの看護婦さ
んが好きなのか？」

山崎「（照れたように）ああ」

葉山「どこに惚れた？」

山崎「恋に理由なんか必要ないだろう。俺の髪の毛の先

端から、足の指の先まで、俺の全身で彼女を愛している。鈴木道子、平凡だけどいい名前だろう。彼女に体を拭いてもらう時、俺は、勃起してしまった。恥ずかしくって、今までの人生の中で一番恥ずかしかった」

葉山「いいじゃないか、それだけ元気だということだ」

山崎「十年以上も前だけど、誰にあげるといってもなしに、パリで小さなダイヤがついたピアスを買った。今になると、彼女のために買ったような気がする」

葉山「まだお前の人生に現れていない彼女の為に」

山崎「そう」

葉山「ピアスって、耳に穴を開ける？　痛いだろうが」

山崎「僅かな痛みを与えたい。愛には、いつも他人に対する痛みが少しあるもんなんだ」

（面会時間の終了を告げる放送）

葉山「それじゃ、失礼するよ」

山崎「明日も寄ってくれよ。帰り道だって 言った
じゃないか」

葉山「うん、出来るだけそうするよ」

山崎「頼むよ」

葉山「……」

山崎「淋しいんだ。女々しいと思うかい。来てくれ
るなら、そう思われてもいい。」

葉山「……」

山崎「もう少しを話したい。何を言いたかったのだ
ろう。ああ、焦ると言葉が逃げて行く。うん、そう
だ……、人間って、目的を持って生きているよなあ。
そして、目的が達成されたら幸せだと思っただろ。だ
けど、本当の幸せってそんなもんじゃないような気
がする。もっと些細なものなんだ。ドアのノック、
その向こうに彼女がいるかもしれない。明日お前に
会えるかもしれない。明日の空には、俺の好きな形
の雲が浮かんでいるかも知れない」

葉山「安上がりだなあ」

山崎「そうさ、安上がりさ。すなわち、小さな希望
というか、微かな渴きなんだ。それがなければ、何
も輝かない。(窓の外に眼をやる)雨が降って来た
ようだなあ。光がにじみ始めた。お前、傘持ってい
るか？」

葉山「大丈夫、たいした降りじゃないし、それ程
空の下を歩かない。じゃあ」

(病室のドアの開閉)

(ドアの開閉)

ママ「いらっしやい」

葉山「やあ」

ママ「葉山さん、濡れたんじゃない？」

葉山「霧雨だから、じっとりしているくらいだ」

ママ「上着脱ぎなさい」

葉山「うん、みんなは？」

ママ「雨が降ると電車が混むからって、早々にお
帰り」

葉山「薄情なもんだね」

ママ「ビールでいいの？」

葉山「ああ」

(ビールの栓を抜いてグラスに注ぐ)

葉山「(一口飲んで)今日もママきれいだね」

ママ「おせじはいいの。みんな、居酒屋ってよんでるの知ってるんだから」

葉山「それは、料理に心がこもっていて、ママがきれいで、その上安いって事」

ママ「音楽かける？」

葉山「いらぬ。まだ宵の口なのに、みんな帰っちゃったのか」

ママ「いいじゃない、雨の日に二人きりなんて。ああ、一人で飲んでたら、酔っちゃった。そっちへまわろかなあ」

葉山「ああ、どうぞ」

ママ、カウンターのなかから出て、葉山の横に腰を下ろす。

ママ「アリラン歌っていい？」

葉山「いいよ」

ママ「アリラン　アリラン　アラリヨ

アリラン　コゲロ　ノモカンダ

葉山「ママが故国（くに）の歌うたうなんて、珍しいねえ」

ママ「言葉も知らない故国（くに）」

葉山「御免、止めちゃった。歌ってよ、最初から」

ママ「どうかしたの今日？」

葉山「どうもしないよ。岡さんがなんか言ってたの？」

ママ「座るなり、嫁に行った娘が今日来てるの忘れてたって、飛んで帰っちゃった」

葉山「ママの方も、洋子ちゃん、今日中学の修学旅行から帰って来るんだろう」

ママ「明日」

葉山「あ、そうか。九州の土産話が楽しみだね」

ママ「それよりも、みんなと仲よくしているかが心配」

葉山「大丈夫だよ、洋子ちゃん」

ママ「そうね、私の子どもの頃とは違うんだから。アリランもあの子は知らないし」

葉山「知らないか。ちょっと淋しいね。(間)ママ、幸せっていうのは、それ程たいしたことじゃないかもしれない」

ママ「例えば？」

葉山「子供のことを心配するとか、こうして、ママと話すのが好きだとか」

ママ「とりとめもなく、雨の音を聞いているのが好きだとか」

(会話が一瞬とだえ、雨の音)

ママ「本降りになって来たみたい」

葉山「この煮付けうまいよ」

ママ「九州も雨かしら」

葉山「明日は晴れるよ」

ママ「雨の音を聞いていると、昔のことを思い出さ
ない」

葉山「……」

ママ「中学生の頃、雨は足跡という詩を書いたの。勉強はまるっきりだったけど、その詩だけは、先生がほめてくれて」

葉山「どんな詩？」

ママ「水たまりに、雨が落ちて、小さな波紋をいくつもつくっているの。それが、幼い頃の足跡のように見えて、

雨は足跡

幼い頃の、母を追う私の足跡。

耳を澄ますと

幼い私の足音が聞こえてくる」

葉山「ママって、どんな子だった？」

ママ「朝鮮人の子」

葉山「そんな意味じゃ……」

ママ「母さんの朝鮮服の影に隠れるようにして歩いたの。誰かに見られるのが怖かった。あの時、私の頭は、母さんの腰までしかなかった……。さらった服の感触がとっても好きだったのに、（涙声になる）母さんの匂いがとっても好きだったのに。うつつ、うつつ、かあちゃん……」

(ビールをつぐ音)

葉山「……。ママが泣きやむまで、雨の音を肴に一人で飲んでいるよ」

ママ「有り難う葉山さん。大丈夫。私この頃、泣き上戸なっちゃった」

葉山「ママ、歌ってよ、故国（くに）の歌。最後までできつちりと」

ママ「葉山さん、今日なにかあったんでしょ」

葉山「……。別に何もないよ」

ママ「最後まで覚えているかしら……」

アリラン アリラン アラリヨ

アリラン コゲロ ノモカンダ

ナルル ポリゴカシヌン ニムン

シムニド モツカソ パルピョン ナ

ンダ

アリラン峠を 越えて行く

私を捨てて行く君は

十里も行かずに足痛む」

(アリランが少しずつ小さくなり、雨の音に混じり消えて行く)

(居間の戸を開ける音)

葉山「只今」

妻「お帰り、ねえ、聞いていい？」

葉山「ああ、難しい質問でないなら」

妻「テトリスをしながら、あなたを待つ、文学界を
読みながら、あなたを待つ、教育テレビを見ながら、
あなたを待つ。どれが一番楽しいと思う？」

葉山「分からない」

妻「みんな楽しい。あなたを待つ以外は」

葉山「いやみ？」

妻「レトリックよ」

葉山「山崎、思ったより元気だった」

妻「遅いから、行かなかったと思った。ごめんなさい」

葉山「(取りなすように)若ノ花、勝った？」

妻「うん、勝った。曙も勝った」

(ブリッジ音楽)

(ドアのノック)

山崎「(弾んだ声で)どうぞ」

(ドアが開く)

山崎「来てくれた」

葉山「食事中か」

山崎「いや、今、終わった。やっぱり来てくれた。待ってたんだ。悪いけど、これを窓際に置いてくれないか」

葉山「これを？」

山崎「残した飯を置いてやる。明日の朝、鳥が来るんだ」

葉山「鳩や雀かなあ」

山崎「時々は、掌から逃げ出した文鳥まで来る。十

八階はきついだろうに。それに、真夜中に、鳥が飛ぶ。白い大きな鳥だよ。あ、そこでいいよ。今日は、野菜も少し添えてあるよ」

葉山「（間）つるべ落とすだね」

山崎「ああ、見る見るうちに日が落ちていく。葉山、お前の家はどの方向になるんだ」

葉山「今、日が落ちていくあたりだと思う」

山崎「あのあたりか……」

葉山「少し窓を開けようか」

山崎「それ以上は開かないよ。システムなんだ。誰も飛び降りる事が出来ない」

葉山「……。風が冷たい。冬が来るぞ」

山崎「葉山、お前は死ぬのが怖いか」

葉山「……。誰だって、怖いだろう」

山崎「死ぬのは、確かに怖い。だけど、葉山、時々、わくわくするんだ。嘘じゃない。本当にそうなんだ。自分が知らない所へ跳ぶ。そこには何も無いかもしれないけど、とにかく違う世界に跳ぶんだ。その時は、どうして、いつも人は、死に顔を背けるのだと思おうよ」

葉山「死ぬもんか。俺より長生きするよ。只今恋愛中じゃないか」

山崎「どうして、生きていることだけをよしとするんだ。葉山、誰でも例外なしに死ぬんだよ。それは自分の運命が誰も知らない世界に跳ぶんことだと思う。わくわくすることだと思う」

葉山「……」

山崎「恋愛も、跳ぶんだよ。今まで俺は、相手の心の闇を知るのが怖くて、何時も相手の心の前で立ち止まっていた。そして、自分が満たされることだけを考えていた。恋愛なんて、何も特別な事じゃない。平凡な事なんだ。四十年以上生きて来て、初めて分かった。理屈じゃない、跳ぶんだって」

葉山「どうして、彼女に打ち明けない」

山崎「何も言えなくなる。本当の愛とは、心で何万回繰り返しても、現実の一言が言えないものなんだ。苦しいものさ、切ないものさ。こんな人生があると知らなかった。朝の挨拶、山崎さん、よく眠れましたか？ 山崎さん、よく食べて、体力つけて下さい。よかった、山崎さん、血圧は正常。山崎さん、

おやすみなさい。……。山崎さん……。それだけでも十分幸せなんだ」

葉山「……。泣いているのか？」

山崎「胸が一杯になった。自分はなんて幸せなんだろう。俺、小さい頃から、泣かない子だった。人前で泣いたの生まれて初めてだよ」

(時間経過の音楽)

葉山「それじゃ、帰るよ」

山崎「話したくなったら、電話をかけてもいいか？

迷惑じゃないなら」

葉山「(間) いいよ、いつでも」

(ドアの開閉)

(居間)

妻「そんなに思われるなんて幸せ。美しい人なんだろうな」

葉山「美人じゃないよ。不美人といってもいいかもしれない」

妻「美人よ、あなたが何と言おうとも。あなたの審美眼を知っている私が、聞いてしまったのが間違いだった。それに百歩譲っても、恋は美人が独占するものではない」

(間)

葉山「俺と結婚したの間違いだと思っ」

妻「どうしたの？」

葉山「いいや、別に」

妻「私、そんなこと考えないの」

葉山「何故？」

妻「考えたって仕方ないじゃないの。結婚したんだから」

葉山「もう、十二時前か。明日も忙しい。寝よう」

(柱時計が5時を打つ。少し間があつて、電話のベル)

妻「電話が鳴ってる」

葉山「（寝ぼけた声で）あああ、今頃誰だろう？」

妻「でるわ」

葉山「（はっきりとした口調で）いや、俺がでるよ」

（玄関に向かう、受話器を取る）

葉山「葉山です」

山崎「こんな時間にすまない」

葉山「山崎か」

山崎「どうしても話したかったんだ」

葉山「かまわないよ」

山崎「お前が帰った後、彼女が初めて自分のことを語ってくれた。父親のこと、母親のこと、弟のこと。

夢のような時間だった」

葉山「よかったじゃないか」

山崎「それから、ずっと起きている。窓から、外を見ているんだ」

葉山「疲れるよ、早く眠らないと」

山崎「いいや、眠れない夜は、何時もこうなんだ。」

日が移るのを見ている。今日は、楽しかった時間を
反復している。眠ってしまったのがもったいない」

葉山「深夜、鳥は飛んだか？」

山崎「ああ、盛んに飛んでいた。白い光のように、
闇の中をずっと飛んで行く。鳥だけじゃない、時々
人も来る」

(音楽)

葉山「しばらくすると、夜が明けるね」

山崎「街が眠りから覚める。それは、小さな音から、
始まるんだ。何の音か分からない、だが、小さな音
が街を起こす。音は、街の隅々までに広がっていく。
俺にも、はっきりと聞こえる。それは、病院にもや
って来る。廊下の隅に生まれる音。病人の寝返りか
ら生まれる音」

(小さな音楽)

山崎「お前の家の方向を見ている。俺はね、この光

景や音をお前に伝えたい。今、俺の见ているもの、
聞いているものをお前に伝えたい。そう思うとたま
らなくなつて、電話をかけてしまった」

葉山「うん、見えるよ。街もお前も。聞こえるよ、
小さな音も」

山崎「起こしてしまつて悪かつた。今日は、来てく
れなくていいよ。俺ばかりがお前を独占できない」

葉山「気にすることないよ。彼女の耳に何時ピアス
が輝くか、楽しみにしているよ」

山崎「多分、それはないと思う。俺が渡すこともな
いだろうし……。それに、彼女たちは、職場で飾り
を身につけない。じゃあ」

葉山「それじゃ」

山崎「(間) そちらから切つてくれよ」

葉山「ああ、」

(受話器の置く音)

(バー「愛」)

岡「今日は友達の外へ行かないの」

葉山「今夜は飲み友達優先。それに、今日はいいて」

岡「気を使ってるんだろ」

葉山「さあどうだろう。……。岡さん、あの部屋から、ここが見えるかなあ」

岡「見えるわけないしよ。地下だよここ」

葉山「あいつ変な事言っていたから」

岡「変な事？」

葉山「薬のせいかもしれないけど、窓の外に何人もの人が見えるんだって。中には酒を酌み交わしている奴もいる。あれは、光の海からやって来るのかもしれない、お前が言っていたように、この部屋と何処かで繋がっているのかも知れないって」

岡「ふうん、俺達の影絵が映っているのかなあ」

葉山「真夜中に鳥が飛ぶとも言ってた」

岡「それは、本当だ。俺も見た事がある。真っ白な大きな鳥だ」

客A「（離れたカウンターから）ママ、あの花はなんていうの？」

ママ「まあ、知らないの、花音痴ね」

客B「俺の知っているのは、桜と、チュウリップと、菊かな」

客C「俺は朝顔も知っているぞ」

客A「やかましいよ、俺はあの花の名前をママに聞いているんだ」

ママ「本当に誰も知らないの？ 葉山さんも、岡さんも知らない？」

岡、葉山「知らない」

ママ「愛する岡ちゃんにだけ教えてあげる。耳かして」

客A「ひどいよママ、聞いたのは俺だぜ」

岡「え、カトレア」

ママ「う、もう、（歌う）カトレアのように派手な人」

客A「舟木一夫か、ママも古いね。（続ける）スズランのように愛らしく」

ママ「またー忘れな草の花に似て、きよらで優しい眼をした娘」

ママ・客A「みんな、みんな、どこへ行く、町に花

咲く乙女達よ」

葉山「岡さん、ちよつと失敬するよ」

岡「どうしたんだよ。今、坐ったところじゃん」

ママ「葉山さん、どうしたの、もう、帰るの」

葉山「用事を思い出したんだ。ママ、この花一本貰えないか？」

ママ「いやよ。今日買ったんだもの。それに、すぐに帰っちゃうんだから」

葉山「友達が死にそうなんだ」

(エレベーターの階を告げる音。扉の開閉。葉

山の足音。後ろから駆け寄る道子の足音)

道子「(背後から)山崎さんの……」

葉山「(振り向く)ええ、そうです」

道子「今朝から、容体が急変され、非常に危険な状態です」

葉山「それは、もうだめだという意味ですか」

道子「意識が戻ったときに、あなたがいらっしやる事を伝えます」

道子「（立ち去りながら）お名前は、葉山さん、葉山さんですわねえ」

葉山「そうです」

（病室）

道子「山崎さん、分かりますか？」

山崎「分かるよ、分かる。そんなに顔を近づけたら、唇を奪うかもしれない」

道子「（声を潜めて）奪って下さい」

山崎「……。本気じゃないよ。冗談」

道子「葉山さんが来られています」

山崎「葉山……」

道子「お会いになりますか？」

山崎「いいよ、ありがとうと伝えて欲しい。もう、ひとりで跳べる」

（ピアノ曲がしばらく続き。突然止まる）

（電話の受話器を取る音）

葉山「俺、」

妻「あなた……」

葉山「まだ、病院なんだ……。あいつ死んだよ」

妻「（間）そう」

葉山「彼が死んだのが分かったよ。同時に音が死んだ」

妻「音が死んだ？」

葉山「様々な音が、俺の周りを行き来していた筈なのに、一瞬、何も聞こえなくなった。俺にとって大切な音が消えた」

妻「音も死ぬのね」

葉山「まず、医者が出てきて、それを一人だけ来ていた新聞記者が追いかけて、次に機器が運び出され、次に、遠い親戚だという人が、公衆電話に走った。

静まり返った部屋に彼女だけが残った」

妻「部屋に入らなかつたの」

葉山「あいつ、一人で跳べるって。帰ってから話そうか？」

妻「今、話したいんでしょ。続けて」

葉山「ピアス」

妻「ピアス……」

葉山「そう、ピアス。最後に部屋から出てきた彼女の耳に、ピアスがキラリと光った」

妻「……」

葉山「それじゃ、カトレアを彼女に届けてから帰るよ。終電車には間に合うと思う」

(電話を切る)

平成五年八月二十九日 了

「ひとりで跳べる」 梗概

葉山は、日曜日の深夜の前田からの電話で、卒業

後二十五年間親交が途絶えていた大学時代の友人、山崎が重病で入院している事を知らされる。葉山は見舞うのをためらう。しかし、何かに導かれるように、葉山は山崎を訪ねる。山崎は、ホテルのように巨大な病院の、最上階の豪華な個室のベットに、ぽつねんと腰掛けていた。二十五年の空白は一瞬にして氷解する。学生時代の話、葉山の近況、二人の話は弾む。そして、担当看護婦、道子にたいする少年のような恋を山崎は語る。十年ほど前、パリで買ったピアスは、まだ出会ってもいない道子の為に買ったのだと話す。美しい夜景を見おろす葉山に、山崎は、その窓際に、カトレアの鉢があったが、鉢植えは病気が根づくと言って、女子社員が持って帰ってしまい、窓が寂しくなったと語るのだった。

次の日も、葉山は山崎を見舞う。山崎は死について語る。それは自分の運命が、誰も知らない世界に跳ぶことだ。わくわくすることだ。恋愛も同じ、跳ぶことだ。どちらも平凡な事なんだ。

翌日、未明、葉山は山崎からの電話に起こされる。

葉山が帰ったあとの道子との会話、楽しかった時

間を反復しながら、ズーと起きている。窓から日が移っていくのを見ているのだと。

夜、葉山は病院に寄らず、行きつけのバーで飲んでいたが、彼は、客の間で話題になっている花がカトレアであるを知ると、花を貰ってあわてて病院に向かう。

病院に着いた葉山は、山崎の容体が急変し、危篤であることを道子から知らされる。葉山さんが来られてます。お会いになりますかと問いかける道子に、山崎は、ありがとうと伝えて欲しい。もう、ひとりで跳べると答える。そして、深夜、山崎の死。最後に病室から出てきた、道子の耳のピアスが一瞬光った。

一九九三年十一月十日 B K ラジオドラマ脚本懸賞募集入選

登場人物

うた

ゆめ

平三郎

音吉

幸助

孝之

秀雄

風やん

先生（女）

生徒A（女）

生徒B（女）

生徒C（男）

算盤の男 A、B、C

孝之を送る人々

背後の声

クラブの客の声

司会者

通天閣の小屋の客

手品師

子供A（女）

子供B（男）

女の子の母親

トンボつりの子供

警官

（風の音。離れて、うたが歌うりんご追分けが聞こえてくる）

うた「りんごの花びらが

風に散ったようなあ

月夜に、月夜に、そつと

え、え、え

津軽娘が泣いとさ」

（歌が少し遠くなり、科白が重なる）

ゆめ「うたちちゃん、相変わらずええ声やなあ。なんや、遠い昔から、聞こえてくるようやねえ」

平三郎「百年の昔から聞こえてくるみたいや。わしらも、百才、百才」

音吉「（笑って）4人で400才や」

ゆめ「もう21世紀も半ばまでできてしもた。平三郎はん、長い間生きたもんやなあ」

平三郎「ゆめちゃん、わしは、ほんの一瞬やった気がする……。どうしたんや、音吉、涙なんか浮かべて」

音吉「あの歌聞いてると、いつも、なんや、胸一杯

になるんや」

(歌声が止む)

ゆめ「あんたら、うちちゃんが転校してきたときのこと覚えてる？」

音吉「覚えてる。わしは、昨日の事みたいに覚えてる」

回想

(小学校の教室。椅子を引き生徒たちが立ち上がる音)

生徒A(女)「起立、礼、着席」

(着席の音)

先生(女)「新しいお友達を紹介します。中川うたさん、みんな仲良くしよね」

生徒 B（女） 「うたやて、おもしろい名前やなあ」

生徒 C（男） 「ゆめちゆうのもけっこうおもしろいで」

生徒 B（女） 「見てみ、音吉がポケーとした顔して、転校生の顔を見てるわ」

生徒 A（女） 「（離れて）手品師のおっちゃんが、どっかで拾うてきた子やて、お父ちゃんが言うてた」

（教室のざわめき小さくなり、風の音）

音吉 「うたちゃん行こか。ああ、さつき歌てた思たら、また寝てる。起きや、行くで」

うた 「もう、大好きな羊かん食べよとしてたのに。

消えてしもたやんか」

音吉 「夢や、夢。なんぎやなあ」

平三郎 「また、明日こう。もういっぺん大阪城眺めて帰るか」

ゆめ 「あっ、見てみ、鬼がいるわ」

平三郎 「石垣の上に座ってこっち見とる」

ゆめ「鬼が見えるときは運がええんよ」

平三郎「苦しまんよ、コロツと、死ねまつか」

うた「鬼は、年寄りが見る幻なんやろか。人の心を映す鏡や言う人もいる」

音吉「わしは、鬼なんか見たない」

(風の音。落ち葉を踏む足音)

うた「ほら、また、ビルの上から、旧式のパラシュートつけて、ほら、飛んだ。命かけてなんであんな阿呆な事すんのんやろ。何であんなに死に急ぐんやろ」

音吉「ビルダイビングや。毎日のように死んでる」

ゆめ「ビルの壁にへばりついて……。生きる目的失た若いもんが命がけでいちびってるんかいな」

うた「あんたもいっぺん飛んだら」

音吉「いやや、まだ命が欲しいわい」

うた「いつまで生きてたら気が済むんやな、せやけど、こうして見てるのは面白いなあ。あ、また、飛んだ」

平三郎「がんやエイズは征服されたし、アルツハイマーによう効く薬もできた。せやけど、その分だけ、みんな、味の薄い人生を背負うようになった気がするなあ」

音吉「あんたは、ずっと、髪の毛の薄い人生を背負うてる」

平三郎「お前みたいなおもろい顔よりましや」

音吉「ほっといて、おもろい顔は、飽きがこうへん。ひ孫笑わすのにおもちやがいらん」

ゆめ「しようもない事言うてんと、はよう浮見町に帰ろ。(歩く)うたちちゃん、いつまでもぽけつと空見てんと、おいとくで」

うた「(離れて)また飛んだ」

音吉「(歩きながら)バスはまだかいな」

平三郎「(歩きながら)バスはとつくの昔からあらへん」

音吉「(足音止まる)ほんなら、あれなんや？」

平三郎「あれ、バス停がある……」

ゆめ「昨日はなかった」

うた「(三人に近づいてくる)みんな、なにしてん

の。バス停やんか……。よかった、後はバスに乗って帰ろう」

ゆめ「何でもすぐに信じられて、うちちゃんは幸せやなあ」

うた「（少し離れて）バスはまだかいな。冬は寒いと決まっているのに、日溜まりは、ほかほかあったこうて眠うなる」

平三郎「あああ、かなんなあ、うちちゃんがへたりこんで、また、船こぎはじめよった」

ゆめ「うちもはよ去んで、おこたで寝よ。今日も一日生かしてもうてありがとさんでございます」

平三郎「まだ一日おわってへんで、いつなんどき、コテつといくやら分からへんがな」

ゆめ「バスも来うへんらしいし、ほな、ぼち、ぼち去のか、おきや、うちちゃん」

うた「うるさいなあ。うーん。（伸びをして立ち上がる）。あれえ、バスがきよった。まだ、夢みてるんやろか？ かげろうがたってる。その中をバスが揺れるようにして、やって来よる。ほら、ほら、ほら」

ゆめ「陽炎やて、阿呆な、この寒空に……」

平三郎「いや、ほんまや、ほんまに、バスがきよる」

音吉「待っててよかったなあ」

（バスの音が段々近づいてくる。そして止まる。扉の開く音。ドヤドヤと乗り込む）

平三郎「ちよつと待って、うたちちゃん何してるんや、はよ乗らんかいな。なんぎやなあ、ほんまに。自分が乗るのを忘れて、外で手ふってるがな」

音吉「はよのり、よいしよと」

うた「どっこらしよ」

ゆめ「グズ」

うた「（即座に）ブス」

ゆめ「……」

（バスの扉の締まる音）

ゆめ「うちは窓際がええ」

音吉「（床に座り込む音）わしは、床がええ」

うた「うちは、一番後ろのひろーくて、ながーい席がええ。バスの揺れに合わせてもうひと眠りしよおと」

（バスが動きだす音）

平三郎「この揺れが何とも言えんなあ」

音吉「なんや、ほっとする」

ゆめ「バス乗んの何年ぶりやろ」

平三郎「わしは、高校の一年は電車で次の一年はトロリーバス、ほんで、次は、今乗ってる、（声を詰まらせる）」

ゆめ「トロリーバス……。なつかしいなあ、バスにアンテナつけて電車みたいに電線から電気もろて走るんや。どうしたん、平三郎さん。バスに感激して泣いてるんか」

平三郎「年とると涙もろうなって」

うた「（離れて）あ、大阪城の天守閣に夕日が落ちて行く。きれいやなあ。ビルの谷間のお城はほんま

にかわいそうなくらい小さいわ」

ゆめ「あれ、うちら何処から大阪城を見てるんやろ？」

平三郎「なんやよう見たとこやと思たら、浮見町に帰って来てるがな、乗ったと思うたら、もう降りな」

うた「いやや、もっと、乗ってたい。何十年ぶりに乗れたバス降りるんいやや」

(バスのエンジンをふかす音)

平三郎「そんなむちやな、浮見町を通り抜けてしまうがな」

音吉「大阪城循環バスって書いたるわ」

平三郎「それやったら、安心や、何処で降りても直ぐに帰れる」

音吉「せやけど、動物園の熊みたいに同じとこばかりぐるぐる回ってるんで、なんや、阿呆みたいやなあ」

ゆめ「(独り言のように)おかしいなあ」

うた「なにがやの？」

ゆめ「ちよつとこつちきてみ」

うた「ゆめちゃん、なんか面白いもんでもあるの？」

平三郎「なにをぶつぶつ言うてるんや」

ゆめ「な、おかしいやろ」

うた「そう言うたら、そうやなあ」

ゆめ「たしか、去年、山田はんは、息子とこへ行つた筈や」

うた「そうや、そうや、今は誰もいてへん筈や」

平三郎「どないしたんや？」

ゆめ「ほら、やっぱりや」

平三郎、音吉「なにが？」

うた「ほんまや、見えたわ、洗濯もんが干したる」

（バスが止まる。扉の開く音。幸助さんがバスに乗ってくる）

幸助「こんばんわ、あら、あら、みなさん、おそろいで」

平三郎「幸助さん、何処へ」

幸助「いや、ちよつと」

(バスの扉の締まる音。走り出す)

音吉「あいかわらずやなあ幸助さん。若い頃から無口や。黙々と自転車の修理してはったもんな」

平三郎「それに、おしやれ。作業服が油で汚れているようなことはあらへんだ。丸がりで、何時も、ジャイアンツの野球帽かぶつとつた。そういうたら、葬式の写真も野球帽かぶつとつたなあ。わしが酔うて、からんで、タイガースのなにかあ……」

ゆめ「えっ」

平三郎「あっ」

うた「(離れて、うたの笑い声) いややわ、

幸助はんの助は助平の助や」

幸助「(離れて) えへ、そんな……」

音吉「せや、せや、町内であいつだけがジャイアンツや。ジャイアンツの勝った晩、自転車屋の表を通ると、小さい音痴な声で、お経みたいな巨人の星歌

てやがった。自転車のチューブ水につけながら、思
い込んだら、試練の道を……」

平三郎「あのなあ、音やん……」

音吉「（平三郎を無視して）夜伽に、供養になるい
うて、いややったけど皆で巨人の星を歌わされたな
あ」

平三郎「夜伽やろ、音やん……」

音吉「（平三郎を無視して続ける）それに、葬式の
日には、息子さんがなあ、他の人に見せたら、破ら
れたら困るよって、温厚で優しい、ほんで教養の溢
れる音吉さんにだけ見てもらおうて、古い茶色の
ペラペラの封筒を見せますんや、それに汚い字で、
たからものと書いたんねん。何んやと思う？ ポロ
ポロになつとつたけど、長嶋のサインやった」

平三郎「よう喋りよったなあ、とりあえず今とは関
係ないことを」

ゆめ「それに、夜伽や葬式やいうて、なんにも思わ
へんねやろか」

音吉「思わへん……」

平三郎「あそこにいるのん誰や？」

音吉「誰やて、幸さんやがな」

ゆめ「誰の葬式の話してたん」

音吉「幸さんや、ありゃ……」

平三郎「（声を潜めて）ゆうれいや」

ゆめ「いや、違う。このバスがおかしいんや。町の様子が少しずつ変わって行く。ほら、あのコンビニは五年前店閉めたはずや。信屋先生はとっくに医院を辞めはったはずやのに、看板が前のままや。少しずつ昔に帰っていく。信じられへんけど、バスは時間を遡ってるんや。みんな、降りよ、何処へ連れて行かれるか分からへんよ」

（バスのとまる音。幸助さんがドアに向かって歩いてくる）

幸助「どなたはんも、お先に」

（うた、後ろの席から移動）

うた「幸助さんと話したんは、ほんまに久しぶりや

った。(間) みんなどないしたん？」

ゆめ「うち降りる、家に帰る」

(ゆめがバスを降りる音)

ゆめ「(遠くで) 幸助さーん。うちも帰る」

うた「ゆめちゃん行ってしもた。どないしよう」

音吉「わしらも降りよか」

(ゆめの足音。泣きべそをかいている)

音吉「あれ、あっちから来るのゆめちやうか」

平三郎「どないしたんや」

(ゆめがバスに乗ってくる。バスが動き出す)

ゆめ「幸助さん消えてしもた。ほんで、なんぼ行っても家に帰られへん。家の前まで行ったら、家がふつと消えてしまiyor。せつかく豪邸建てたのに。

金庫にいっぱいお金入れたんのに。ワアアア(大声

で泣き出す」

うた「泣かんと羊羹食べ」

ゆめ「うん」

音吉「自分だけ帰るとするからや。あの世には金も豪邸も持って行かれへんで。ざまー見ろや」

ゆめ「ワアアア」

うた「ほんまにせっかく泣き止んだのに、音吉はまた泣かすんやから」

ゆめ「うたちゃんはやさしいなあ。（明るく）羊羹もう一つ頂戴」

うた「いやや、うちののがうなる」

ゆめ「ようけ持ってたのにケチ」

平三郎「喧嘩しな。まあ、泣くほど帰りたい家があるのはええこっちゃ。わしは、帰っても一人や。このバスの方がおもしろい。なんや音やん、わしの顔になんかついてるか」

音吉「ちよつと、辛いなあ」

平三郎「辛いことなんかないわい」

ゆめ「音さん、タマおったで」

音吉「えっ、十年前に家出したタマが」

ゆめ「三角公園で、泣いてた」

音吉「えらいもうろくしてたやろ」

ゆめ「のらくろみたいな顔して、生まれてまだ何日も経ってへんだ」

音吉「おかしいなあ」

平三郎「おかしくない。おまはんの頭がおかしいんや。このバスは時代を遡ってるんやろ。十年前に家出した猫が、子猫になったんやから、二十年遡ったんや」

音吉「わしバス降りるわ、タマ探しに行く」

平三郎「おまはんが会いたいんは、人やのうて猫か。

ちよつと、辛いなあ」

音吉「何とでも言え、会いたいもんがないよりましや」

平三郎「なににお、言うたなあ」

音吉「それがどうした」

ゆめ「やめって、ええ年してつかみ合いなんかして。音さん、行ってもじゃないよ。タマはうちの両手の中で、溶けるように消えてしもたんやさかい」

(ブリッジ音楽)

うた「時間を遡るバスなんやて。ほな、終点でお母ちゃんに会える」

音吉「ふん、お母ちゃんの顔も知らんくせに。その前に恋しい清次に会えるわ」

うた「あんな奴に会いたない」

(白鷺の鳴き声)

音吉「白鷺がようけ飛んでる。初めは、自然が帰ってきた言うて喜んでたけど、ほんま、喧しいだけの鳥やなあ」

ゆめ「ほら、あのビル、平三郎さんの会社やろ」

平三郎「降ろしてや」

うた「何処行くの？」

平三郎「何処行くて、会社に決まってるがな。はよ、合理的なシステムをつくらな。合理化や、合理化が一番」

ゆめ「あんだ、もうとつくに会社辞めてるて」

(バスの止まる音。ドアが開く。算盤を振りながら
乗り込んでくる。振る算盤の音。ザツ、ザツ、ザ
ツ)

ゆめ「なんや、この人ら、みんな片手に算盤もつ
て」

平三郎「あつ、山本さんやないか。松本主任。有本
課長もいたはる」

男(A)「あつ、わしらから仕事奪うた平三郎がい
よる。ザツ、ザツ、ザツ」

男(B)「わしらの仕事を返せ。ザツ、ザツ、ザ
ツ」

男(C)「面白かった仕事を返せ。ザツ、ザツ、ザ
ツ」

男(A)「算盤を返せ。何年もかかってつかんだ技
を返せ。誇りを返せ。ザツ、ザツ、ザツ」

男(B)「家に帰って飲む、一杯のビールの旨さを
返せ。ザツ、ザツ、ザツ」

平三郎「合理化や、合理化や、(叫ぶ)もう、あん

たらは、みんな、いらんねん、ご破算なんや（算盤の音、ザツ）」

（算盤の音一斉に止む。（間）。）

うた「みんな消えた」

（バスが動き出す）

平三郎「わしが入社した頃は、計算部は算盤の音だらけやった。わしは、算盤が出来ひんよって、電卓専門。人差し指の平やんいうて、みんなに馬鹿にされてたんや。わしが目つけたんはコンピューターや。わしには先見の明があったんや。もう、算盤の時代やない」

音吉「わし、まだ算盤つこてるで、別に不自由や思わへん」

平三郎「規模が違う規模が。酒屋の経理なんか指でやったらええねん」

音吉「えらい言われかたやなあ」

(バスが止まる)

平三郎「ここや、このビルの35階、計算部がわしの職場や」

音吉「なんやこのビル空き家みたいやで」

平三郎「なんやて、そんなアホな。行ってみる、この目で見てみる」

音吉「ほんなら、行き。わしらはバスで待ってるさかい」

(平三郎、バスを降りる)

ゆめ「平さんの会社つぶれたんやろか」

うた「辞めた会社でも、どうなったんか心配なんやろか」

音吉「平さん、会社人間やったさかい」

(バスのドアの開く音。バスに乗ってくる平三郎の足音)

音吉「平さん帰ってきた。ほんで、計算部はあったんか？」

平三郎「（少し離れて）あった。窓硝子は割れ、ロボロになって、電気も消えて、誰もいてへんだ」
ゆめ「あっただけでもよかったやん」

平三郎「白鷺が一匹、部屋の真ん中で死んどった」
うた「白鷺？」

平三郎「（近づき、シートに腰を下ろす）あんまり高こう飛びすぎたんや」

（白鷺の鳴き声。バスが動き出す）

平三郎「合理化！」

3人かかった仕事を一人！

システム！

そんな考え方は、論理的やない！

そない言うてるうちに、広い部屋にわし一人、窓から、大阪城見るんが仕事になった。晴れた日、大阪城見ると、鬼が、天守閣で、わしの方をじっと見

てるんや。わしを笑てるんやろか、哀れんでるんやろか……。ほんで、思い出したようにトンボを切りよる。(うなだれて)あの時からや、鬼が見えだしたんは」

音吉「窓際族になつて、鬼が見えたんか」

平三郎「ほんで、しばらくしたら、首や。合理化してるつもりが、何時の間にやら、自分も合理化された。あほみたいや」

ゆめ「それでも、年金もろて、大阪城の絵書いて、去年は個展まで開いたやん」

平三郎「(明るく)うん、せや、大阪城をぼけっと見てんのも飽きたし、わし、鉛筆で、城の絵を描いた。春の大阪城、夏の大阪城、秋の大阪城、冬の大阪城。同じや思うてたけど、みな違う」

音吉「ふん、ええ気なもんや、会社に守つてもうて、退職金もろて、年金もろて、趣味で絵を描いて。わしら、商売人は、定年も年金もないかわりに、今今まで働きづめや。馬鹿にすんな。なんや、あんな絵、どこにも鬼がおらへんやないか。嘘っぱちや」

平三郎「うるさい。上司には逆らわれへん、言いた

いことも言えへん、自分の時間を切り売りしてたもの苦勞なんかお前らに分かってたまるか。昼の日中から、女の尻追いかけてやがって」

音吉「なんやと」

ゆめ「二人とも、何をおこってんの、そんなことどうでもええやん。うちは、お金があつたらええ」

うた「うちは、そばに優しい人がいたらええ」

音吉「女はええなあ、かっこつけんでええよって」

（バスが止まる）

うた「（離れて）雪がちらほら降ってきた。（歌

う）雪やこんこん、霰やこんこん」

ゆめ「銃を担いだ孝之さんの銅像の肩に雪が落ちてなんやさみしそうやなあ。西暦2010年国民栄誉

賞」

（遠くで「おっちゃん」の声）

平三郎「まさか、銅像が喋るかいな」

ゆめ「日本に志願兵制度が出来て、初めての戦死。世界正義のために異国で倒れた、若き英雄。テレビや新聞がようけ来た」

音吉「泣かなあかん親父さんが、まちごて、カメラに向かって、ピースってやったもんなあ」

平三郎「そういうたら、わしらは戦争の知らない子供たち言われた時もあったなあ」

ゆめ「それから、団塊の世代」

平三郎「せやけど、いつも勝たなあかん言われ続けしてきた気がする。いつも戦中派や、わしら」

（バスの窓を叩く音。近くで「おっちゃん」の声）

平三郎「孝之……」

孝之「おっちゃん、この銅像壊して」

平三郎「なんでやねん。お前は名誉の戦死をしたんやろ」

ゆめ「そうや、あんたは町内の英雄やで。ほらみてみ、音さんなんか、サインしてもらお思て、ポケットひっくり返してるやんか」

音吉「あった、あった、（間）鼻紙しかないけど」

孝之「サインやなんてとんでもあらへん。本当の話
きいたら、僕のサインなんか、お尻ふくにも使わ
へんと思う」

平三郎「本当の話……」

孝之「戦争いうても、敵の姿を見たことあらへん。

弾も飛んでこうへん。平和なもんやった」

平三郎「平和な戦争やて、なんやそれ」

ゆめ「テレビで見た国連平和軍は目がギラギラして
て、気楽そうに見えへんけど」

うた「服も汚かったし、痩せてた」

孝之「ああ、あれ、あれはテレビの撮影用や。顔に

炭塗って、みんなスター気取りや」

平三郎「なんや、やらせやったんかあれは」

孝之「せやけどおっちゃん、戦争はおもろかったで。

いろんな国の武器があったなあ。アメリカ、フラン
ス、ニッポン。使い放題や。ほんで、晩になったら、
ミサイル撃って、花火大会や。日英米で、玉屋！」

平三郎「おまえらアホか。テレビで見たミサイルは
お前らが撃つとたんか」

孝之「うん、せや。テレビゲームみたいやで」

平三郎「国連平和軍は、戦争やめさしに行ったんちやうんか。それやったら、たきつけて、けしかけるとやないか」

ゆめ「まあ、いちいち怒らんと、話聞こ、平さん」

孝之「暇な時は缶けりしたりして遊んでん。ある日、ジョンちゆう犬みたいな名前のアメリカ人が、地雷を見つけよってん。道の真ん中に落ちてたんや。それは、おおきなウンコの形をしててん。おもちゃや、孝やれ、ジョンは言いよった。それが周りに広がって、孝やれの大合唱や」

ゆめ「何をやれて？」

孝之「ぼく、音痴やし、何にも芸あらへん。パーティーの時、えらい困って、赤のふんどしいっちよで走ったら、それがえらい外人に受けてん」

音吉「ふんどし、えらいもん持っていつとてんなあ」

孝之「ぼくの趣味やねん」

音吉「おっ、赤フンや」

孝之「ブル、さむ。かわいらしいのが顔だしてへん

かを確認してと。よーいどん」

（走る音）。

孝之「天皇陛下万歳（倒れる）」

平三郎「おもちゃの地雷の上に倒れたんか？」

孝之「ほんで、真っ白になった」

ゆめ「ほんもんやったんかいな」

うた「ぷっ（吹き出す）」

ゆめ「うたちちゃん」

うた「あいた、なんでつねんの」

孝之「みんなまだ笑たまんまの顔しとった。顔の筋

肉が直ぐにもどらへんだんやろな。その顔の上に、

ぼくの、肉や、血が、ポタポタと。世界正義のため

の名誉の戦死か……。 （間） 。せやけど、りりしい

ええ顔しとるなあ。一生でこんな顔したこと一回も

なかったやろう。ふ、寒う。服着て、今日は、イタ

リアの銃かつご。 （間） なあ。 （泣き声になる） お

願いや。この銅像、壊して。僕は英雄やない」

音吉「肩の銃が重そうや」

うた「孝之さん、ふっと、かき消すように消えてしまった」

（孝之さんの出征、万歳の声）

うた「あ、孝之さんの出征や」

ゆめ「孝之はん、行ったらあかん。孝之さんがかわいそうや」

音吉「わしらが送り出したんやろか」

平三郎「わし、旗振って、万歳言うた」

うた「うちも言うた。かんにん。人間ってアホやなあ、21世紀になっても何もかわってへん」

平三郎「世界正義に踊らされて名誉の戦死。ほんで、死んだ後も、英雄という名前で、踊れ！、か。むごいなあ」

うた「あっ、孝之さんがうちらにむこうて、敬礼をしたはる」

音吉「わしらもしたろ。な」

（人のざわめき、万歳の声。小さくなって、消える。）

地震)

平三郎「なんやこれは」

全員「わあー地震やあ」

ゆめ「阪神大震災や」

音吉「ふっ、やっとなまった」

うた「うちらは大したことなかったけど。神戸は大変やった」

平三郎「みんながんばったもんなあ。二十一世紀には、神戸は首都や」

音吉「総理大臣はくじ引きやけど」

うた「この頃はいろんな事があった」

平三郎「オーム、オームで無茶苦茶やった」

音吉「ノックが知事になりよった」

ゆめ「ほんでノックダウン」

平三郎「大リーグ相手に、野茂がバッタ、バッタ三振の山。世紀末で唯一の明るい話題やったなあ」

うた「(離れて)あれ、誰かバスを追い抜いていきよった」

平三郎「秀雄さんとちやうか？」

ゆめ「まさか、うちの人が」

音吉「バスより速い。なんであんなはよ走らなあかんねんやろ」

うた「秀雄さん、何で博打になんか狂たん？」

平三郎「酒も呑まへん、物知りで、浮見町のソクラテス言われたはった。気の小さそうな人やった」

(バスがエンジンをふかす)

平三郎「やっぱり秀雄さんや」

秀雄「ハッ、ハッ、あの時分は夢中になるもんが何んもなかった。いいや、せやない、子供の頃からなんもなかった。秀ちゃんは、勉強できるよって先生がええわ、周りから言われて、先生になったけど、子供がこおてしやなかった。先生のわしの方が登校拒否。毎日パチンコに行ってたんや。そのうち博打が面白なって……」

ゆめ「あんた」

秀雄「なんや、ゆめか。面目ない」

うた「秀雄さんバスに乗って話そ」

秀雄「ほんなら、走んの疲れたよって乗せてもらお
か」

(秀雄バスに乗り込む)

ゆめ「あんた、あの景気のええ時分、三度のご飯が
食べられへん家があるやて、信じられる？ 病院の
まかないやってて、残ったご飯、人の目盗んでおに
ぎりにして、家に持って帰って子供と二人で食べた
んよ。子供のほったにご飯粒ついたんを、取って
やって、口に入れたら、明日のこと忘れて、ふっと
笑うた。亭主が働いてのんびりしてた頃は味われへ
んだ幸せやけど」

秀雄「どんな時も真っ暗はないんやなあ」

ゆめ「よう言うわひと事みたいに。子供の手引いて、
線路の上歩いたんや。もう、どうなつてもええ……。
せやけど、なんやしらん、急に腹がたってきて、な
んで、あんたのために死ななあかんのや。ふと、見
たら手の先に小さいのが、ぶら下がってる。去のか、
ほんで、今日は、ラーメンつくったる言うたら、嬉

しそうな顔して、笑いよった」

秀雄「苦勞かけたなあ、わしも色々理屈いうけど、結局は博打が面白かったんやと思う。先が分からんということとはものすごく面白いことなんや」

ゆめ「勝手やなあ、それで、うちと子供を置き去りにしたんか」

（競艇場の歓声）

秀雄「行け、行け、行きさらせ。やった、やった、やったで」

背後の声「おっさん、よかったなあ、おおもうけやないか」

（競艇場の歓声）

秀雄「行け、行け、行きさらせ。行き……」

背後の声「勝負は時の運や。また今度やおっさん」

秀雄「ああ、あかん。2―5……。そんな気もしたんやな。裏目ばかりや。また、野宿や」

(競艇の歓声消える)

秀雄「家へ帰るか、帰って、お前に謝ろうか、もう一回やり直そかとなんぼも思もた」

ゆめ「うちは、人の倍働いた。そのうち賄いの他に金貸しやった。借りる時は拝むのに、取りに行ったら、鬼のように言いよる。遊ぶためのお金ばっかし借りよって、金かしの方がずーと貧乏やった。あんな」

秀雄「へーい」

ゆめ「あんた、自分がどんな死に方したんか知ってる？」

秀雄「知らん。いつ死んだんかも知らん」

ゆめ「おらんようになって、最初の何年間はどう捜しに行った。おったという場所に行くと、昨日までとか、一週間前とか、結局、死ぬ時まで会わへんだ。捜しに行って聞くあんたの話は、うちの知ってるあんたからは考えられへんことばかりやった。お酒のんで、客と喧嘩したとか、お金を盗んだとか……。

初めておうた人やのに親身になって、あんなんとは、別れた方がええという人も、ようけ、いたはった」

秀雄「もうええ、なあ、わし何処で死んだんや？」

ゆめ「病院」

秀雄「てつきり野たれ死にや思てた」

ゆめ「野たれ死にの方がましちがう」

秀雄「……」

ゆめ「病院に駆けつけると、あんたのベッドは、廊下やった。空の点滴瓶つけて、それに針も外れてた。

手を握ると少しあつたかかった。酔うて、ドブに足突っ込んで動けんようになってたんやて。靴脱いだらすぐに抜けられるのに。アホやほんまに、あんたの博打と一緒に」

秀雄「寒かった。何やそれだけ覚えてる。(間)。

もう、ええ、いわんといて、堪忍や、ほんで、わしは空の点滴瓶つけて、死にかけてったんか……。みじめやなあ、ほんまに」

平三郎「博打の誘惑にまけんと、平凡に暮らしてたら、今は一緒にバス乗ってたかもしれへん」

秀雄「子供は？ えーと」

ゆめ「あーあ、子供の名前も忘れたんかいな。元気やで、あんたと一緒の学校の先生で、ちよつとも、道はずさんと、この前古希やった」

秀雄「それは、よかった、ほんま、よかった。すまんかった、ゆめ、堪忍してや博打はもう、こりごりや」

ゆめ「うち、金持ちになったんよ、もういつペンやりなおそ。も、学校行かんでええさかい」

秀雄「えっ、ほんまか」

うた「何言うてんの、死んだ人にむこて」

平三郎「秀さん、こっちおいで、一緒にお茶でも飲もう」

音吉「マツチの軸賭けて、花札しよ」

秀雄「（もじもじしながら）それが、こうはしてられしまへんね」

音吉「急ぎの用事でもあるんか？」

秀雄「ダービーの締め切りがもうすぐやねん。ほな、さいなら」

（秀雄バスを降りる）

うた「あほらし。せやから走ってたんか」

音吉「死んでもなおらんか」

うた「せやけど、ゆめちゃん、秀雄さんに会えてよ
かったやん」

ゆめ「うん。(思い切るように)音さん、マッチの
軸かけて花札しよう」

平三郎「あんた、博打、憎んでたんと違うの」

音吉「(手を叩く)よし、やろう」

うた「うち、負けへんで」

音吉「わあ、さんこうや」

平三郎「ちきしよう、坊主ばかりや」

音吉「ハゲ坊主やろ、マッチの軸三本」

平三郎「持って行け泥棒」

うた「おもしろい？」

平三郎「おもしろない。音やんマッチの軸で鼻くそほ

じくんのんやめ」

うた「うちの羊かんかけよか」

ゆめ「(弾んだ声で)うん」

（四人の花札に興じる声小さくなる。バスの音。自動車
が猛スピードでバスを追い抜いていく。自転車
のベルの音）

音吉「風やんやないか」

風やん「なんや、音吉にいさんか」

音吉「ぷっ、にいさんやて」

うた「うちらはいくつに見えるんやろ」

音吉「風やんどこ行くんや」

風やん「めばちこできたよって、鶴橋の目医者行く
ねん」

音吉「お前も白髪が目立ってきたなあ」

風やん「アホは年とらへんのに、言いたいやろ」

平三郎「せやけど、風やんはほんま男前やなあ」

音吉「千代の富士みたいや」

風やん「おおきに」

音吉「それで、しゃべらへんだら、ほんま、ようも
てるで」

風やん「こんなところで、いちびってんと、目医者い
こ。あるときは、片目の運転手、そして、その実体

は、正義と真実の人、藤村泰造、ばーん、ばーん。

はいよシルバー、ローレン、ローレン、ローレン」

うた「気づけていきやあ」

風やん「おおきに、ローレン、ローレン、ローレン

（次第に遠ざかっていく）」

ゆめ「えらいこっちゃ、鶴橋行くて言うてたなあ。

風やん止めて」

うた「ゆめちゃんどうしたん」

ゆめ「鶴橋で、車にぶつかって、ほんで風やんは」

（ローレン、ローレン、ローレンの小さい声）

音吉「風やん」

うた「自転車が、空を駆け上がっていく」

ゆめ「消えた」

（ローレン、ローレン、ローレンの小さな、小さな

声。一拍おいて、大きく、ローハイド）

ゆめ「軒下のバケツに植えた紫陽花がきれいなあ」

平三郎「雨の日の紫陽花か……。花が光を含んでる
ようや。都会の下町には季節がないような気してた
けどなあ。気がつかへんだだけかもしれないへん」

うた「ビルが溶けるように消えていく」

平三郎「森ノ宮造兵廠跡が現れた」

音吉「ほんま廃墟や、幽霊みたいや」

平三郎「長い間、空襲におうたまんまの姿で放った
らかしにしたった」

平三郎「音やん、見てみ、廃墟と、京橋のネオンの
海と一緒に眺められるわ」

音吉「どつちがほんまなんやろ」

うた「大阪城が、きれいなあ。鬼はもう、眠てしも
たんやろか」

（歓楽街）

うた「京橋のあのクラブ、うち、ママしてたんや」

ゆめ「下町の歌姫から、ストリップパー、ほんで雇わ
れマダム」

うた「なんやしらん、いつも音吉がおった」

(クラブの喧噪。「うちちゃん、こっち来て」の
声)

うた「うち、えらい人気や」

ゆめ「男だまして、金巻き上げる。うちもやりたか
ったなあ」

音吉「誰が、ブスに貢ぐか」

ゆめ「言うたな、あんたに貸した二十万円返し」

音吉「知らんなあ。未来の借金なんか、返されへ
ん」

ゆめ「……」

うた「そんな、男を騙すやなんて。うちが騙されて
ばっかりやった」

(バスのエンジンをふかす音)

平三郎「バスのスピードが上がったんちゃう」

ゆめ「うん、町の様子がどんどん変わっていく。万

博まであと30日」

うた「うちの家が現れた。あの文化住宅、うん、あの長屋。新建ち言うたんや。あつ、清次がいる。清次さんがうちに会いに来たはる。降ろして」

音吉「行ったらあかん、行ったら、不幸になる。会いとうないて言うてたやんか」

うた「お願い、とめて、降ろして、降ろして下さい」

音吉「(叫ぶ)行ったらあかん」

(バスの止まる音、ドアが開く音。駆け出すうたの足音、追いかける音吉の足音)

平三郎「何処へ行くんや」

音吉「決まってるやろ。うたを止めるんや」

平三郎「なんで、好きやといわへん」

音吉「わしは、いじめっ子の音吉、助平の音吉、それでええ。せやけど、清次は、うたを不幸にする。

流れ者にうたは渡されへん」

平三郎「お前の百年の片思いも辛いやろう。せやけど、うたは、死ぬほど清次に会いたいんや。それが

あの子の恋や」

音吉「やかましいわい」

（平三郎を振り切って、音吉バスを飛び出す。バスのドアの閉まる音）

音吉「バスが消えよった。ここは何処や」

（ストリップ劇場の雰囲気。音楽、野次がドアを越しに聞こえてくる）

うた「音さん」

音吉「うたちちゃん」

うた「あの人、見失のうた」

音吉「ええやん、バスに帰ろ。あつ、歌の出たストリップや」

うた「ほんまや、あんた、よう来てたなあ。ほんで、いつもうちの出番になると、こそこそ逃げ出して。

意気地なし」

音吉「あほ、お前の裸なんか、見たないわい」

うた「嘘つき。見たかったくせに」

音吉「ようし、ほんなら、今見たろ」

うた「そんなんあかん、卑怯もの」

(音吉、扉を押す。客のざわめき)

音吉「なんや、ストリップとちやう」

うた「あつ、ここは通天閣の小屋や。七つの時から、お父ちゃんに連れられて、祭りや芝居の舞台に立って、歌てた。うちは浮見町の歌姫。清次はやくざのヒモ。稼いだけもって行かれた」

司会者「下町の歌姫の登場です」

(拍手)

うた「心で好きと叫んでも 口では言えず

ただあのひと 小さな傘をかたむけた」

客「(かけ声) うたあ、ちゃん」

うた「おおきに

ああ あの日は雨

雨の小径に、白い仄かな からたち

からたち、からたちの花」

（歌が少し遠くなり、音吉の科白が重なる）

音吉「からたちの花って、どんな花やろ」

（拍手が小さくなり、消える）

音吉「あつ、真っ暗になった。（叫ぶ）うた」

（どーんとぶつかる音）

手品師「ぼん、大丈夫か」

音吉「ふっ、ぼんやて。百才がぼんに見える。なん

やここは。手品師のおっさんの大きな影の手の先に、

ほんま、ほんま、小さい女の子がぶら下がってる」

うた「あれ、七つの時のうちや」

音吉「いっぺんにそんな頃に来てしもたんか」

うた「うん。うちが浮見町に来た晩や」

音吉「あん時、初めてあんたに出おたんや」

うた「音ちゃん、うちらだけ、子供の頃に来てしもた。もうバスには戻られへんねやろか。迷子になつたんやろか。うち怖い」

音吉「大丈夫やて、わしがいる」

（「物干し竿」の声。遠く離れて、傘、修繕の声。

軒下の風鈴）

うた「ここがうちの家や。お父ちゃんがいる。ほら、

この窓から覗いてみ」

音吉「いたはる。ほんまに大きな人やなあ。座つたら、畳一枚ぐらい場とつたはる。この熱いのに燕尾服を着て」

うた「あの服の下に、いっぱい手品の種を仕込むんよ。音ちゃん、あの人、うちの本当のお父ちゃんとちがうねん。手品師にするつもりで、旅の一座からもろうてきはつたんや」

手品師「お前、ぶきちよで、手品はあかんけど、歌

が上手やなあ。下町の歌姫や、ふっ」

うた「殆どしゃべらんと、大きな体を申し訳なさそ
うに小さくして、お酒を飲むのだけが楽しみやった。
酔うと、指先から、次々とトランプが出てくる。ま
るで、美しい夢のようや」

音吉「あつ、シルクハットをかぶらはった」

うた「出かけるみたいや」

音吉「ついて行こう」

(町のざわめき)

うた「スーパーへ行かはるんや。足が弱って、地方
へはもうよう行かはらへんだ。せやけど、スーパー
や百貨店の屋上で、子供ら相手に手品するのがもの
すごう楽しそうやねん」

(スーパーのざわめき)

子供A「わあ、鳩や、すごいなあ」

子供B「今度は、白いのんちごて、飴色のんだし

て」

手品師「飴色のんは、ちよつと旅に出て留守なんや。かわりに、こんな花をあげよ」

（女の子の泣く声）

女の子の母親「すみません。この子にも貰えませんか。兄妹で喧嘩してしもて」

手品師「ああ、かまへん、かまへん。ほら、いくつでもでるんや。うた、あの子にあげて。ほな、後頼むで、ちよつと疲れたよつて、あしよこに座つて聞いてるわ」

うた「りんごの花びらが

風に散ったようなあ」

手品師「（呟くように）月夜に、月夜に、そつと…」

子供A「おっちゃん、どうしたん。なあ、おっちゃん」

うた「お父ちゃん、お父ちゃん（声が、小さく小さくなる）」

（野球の実況放送が家から、漏れてくる。そして、遠ざかる。犬の遠吠え）

うた「おとうちゃんが死んで、うち、みなしご。音ちゃん、手つないで」

音吉「（間）うん」

（数人の子供の走る足音が二人を抜き去って行く）

子供「あっちやど、旋回しとる。ホイラーン」

音吉「トンボつりや。まだ空き地がようけあった」

（チャルメラの音。小さな足音）

うた「音吉ちゃん、何してんの？」

音吉「（蹲りながら）蛤をセメントで、擦ってんねん」

うた「貝笛作ってんの？」

音吉「そうや、こうやって、貝の背中擦ってたら、

穴が二つ開きよるんや、そしたら、唇に当てて、吹くんや。あいた、指こすってしもた」

うた「えらいこっちゃ、血出てるやん。うちが吸うたげる」

音吉「うたちゃん……」

うた「音吉ちゃん、貝笛吹いて」

（貝笛、曲は「ふるさと」。バスの近づいてくる音）

うた「あつ、バスや」

（バスが止まる音）

ゆめ「なにしてたん。はよ乗り」

（バスのドアの開く音。二人が乗り込む。バスの動き出す音）

平三郎「大阪城の石垣に、鬼が座ってる」

ゆめ「鬼には、時の流れは関係ないんやろか」

平三郎「なんや、寂しそうやなあ」

音吉「わしらこれからどうなるんやろ」

ゆめ「どンドン、小さくなって、おかあちゃんのお中に戻って、それから……」

うた「ふっと、消えるんやろか？」

平三郎「死ぬということは、そんなんかもしれへん。

だあれも知らんねんから」

うた「はよ、おかあちゃんの、あったかいおなかの中へ戻りたい。やっと、お母ちゃんに会える」

(バスの音消える。(間)。風の音)

警官「(遠くから)もう、お帰りか?　せやけど、

そんなとこでなにしましたはりますのや」

ゆめ「あっ、おまわりさん。なんや、三郎さんかいな。バス待ってんねん」

警官「バス?　そない言いうたら、そのへんにバス停おましたなあ」

平三郎「近くの交番に勤めてるのに、時々帰ったら

んかいな」

警官「なんやかやと忙しいて」

音吉「まあ、盆にでも帰ってくるんはええとせな。うちなんか、何年も帰ってこんわ。猫や犬が家族や。あれ、指の先けがしてる。何時したんやろ、血も出てる。それと、何か言うこと忘れたみたいな気がするなあ。誰か知らんか？」

平三郎・ゆめ「知らん」

ゆめ「三郎ちゃん、あんたとこの隣の家、昨日の雨でつぶれたで」

警官「だあれも住まんようになって三十年、つぶれても不思議やないなあ」

ゆめ「ほな、ぼち、ぼち、去のか」

平三郎「なんぎやなあ、うたちゃん寝てしもてる」
うた「うーん、よう寝た。あれ、みんな帰るんか、ちよっと待って。なんやこれ、うちの足下で、うちが寝てる」

ゆめ「うたちゃん、帰るで、起きや。どうしたんうたちゃん。みんな、みんな、はよ来て、うたちゃんか、うたちゃんが」

うた「なんや、うち、死んだんかいな、それにしても、みんな慌てて。音吉なんか、あれあれ、泣いてくれて。おおきに、みんな」

音吉「うたちゃん、わいは、わいは、あんたが好きや」

うた「おかしいなあ、泣きながら、音吉がなんか言うてる。もう、うちには聞こえへんよおお。体がかかるうなった。死ぬ死ぬって怖がってたけど、こんなもんかいな。うちの百年、面白かったなあ。あれえ、バスが来よった。うち、まだ、夢みてるんやろか？　かげろうがたってる、そん中をバスが揺れるようにして、やって来る。ほら、ほら、ほら」

平成七年八月十五日　終戦記念日　了

登場人物

渡辺 孝 (47)

渡辺 久美子 (39)

渡辺 麻衣子 (9)

渡辺 孝 (子供) (10)

父

母 (72)

兄 (52)

姉 (50)

片山 (35)

女子社員 (25)

男子社員 (35)

女

藤波 (10)

寺本 (11)

市川 (43)

和田 (43)

駄菓子屋のおばさん (70)

飲み屋の店員 (20)

ガソリンスタンドの店員 (20)

クリニックから来た女 (35)

クリニックから来た男 (50)

渡辺（語り）「夜の闇を背景に窓は鏡になった。窓の外の私が部屋の中の私を見ている。誰かとよく似た目だと思った。直ぐに父の目だと気づいた。一重瞼で奥行のない目だ。父の目の形を知ったのは何時の事だったろうか？一緒に住んでいた頃は似ているとは思いもしなかった。肉親は、他人の度合いが深まるにつれ、顔の部分が似てくるのかもしれない。窓の外の私はいつの間にか父の姿になった。少し大きめの背広と、ネクタイを少しゆるめて、立ち飲みのカウンターに肘をついて、私の方を見て、ヨオという風に人差し指と中指を立てて、サインを送ってきた」

タイトル「窓」

駅の雑踏

渡辺（語り）「駅はコンクリートと鉄で出来た通路。高校を卒業して29年間、何時も決まった時間に、私は、その中の一本の通路を歩く。明日から続く1

3年近い日々も、次第に衰えていく肉体を携えて、同じような風景の中を足早に横切って行くのだろう。生きてさえすれば、定年までの行程にそれほどの誤差が生じるとは思えない」

渡辺（語り）「高校を卒業して29年間電気メーカーに勤めている。取り立てて会社にも、家族にも不満はない。ただ、47才になった今、とらえどころのない不安が胸をよぎることがある。それはすぐに日々の生活に薄められ、消えてしまうのだが……。」

車の音が入る。

渡辺（語り）「桜の季節がやってきた。今年の桜は、薄い紅を引いたように霞んで見える。いつだったか、こんな色の桜をみたことがある」

○会社への道

車の音。後ろから早足で近づいてくる足音。

女子社員「渡辺さん、おはようございます」

渡辺「おはよう」

男性社員「おはようございます」

渡辺「おう」

男子社員「咲いてきましたねえ、桜」

女子社員「春ですねえ。お花見を企画しないと」

男子社員「今度の日曜日あたりまでだろうね」

女子社員「それじゃ明後日にします」

男子社員「場所取りは任せて。奈々ちゃんはカラオ

ケセットよろしく」

並んで歩く足音。突然立ち止まる。

女子社員「どうされたんですか？」

渡辺「いや、ちよつと用事を思い出して」

女子社員「用事……」

渡辺「（遠ざかる）今日は休むって言うっておいて

よ」

男子社員「どうしたんだろ」

○電車の中

電車の中

渡辺（語り）「空気を運んでいるような車内。優先座席に深く腰掛ける。都会から出て行く人が、ぽつり、ぽつりと腰掛けている。（ドアの閉まる音）一斉に吊革が揺れ始めた」

電車のすれ違う音。

渡辺（語り）「すし詰め通勤電車とすれ違う。目を閉じると、見えない賽が振られたような、胸騒ぎに似た不安が心の底に広がる。水曜日の取り立てて変わったこともない朝に」

○玄関

呼び鈴を押す。ドアを開ける音。

久美子「はあーい。どなたですか」

渡辺「俺だよ」

鍵を開ける音。

久美子「あなた……。びっくりした。どうしたの」

渡辺「今日は家にいるよ」

久美子「風邪……。熱があるの。おでこ出して」

渡辺「いいよ、子供じゃあるまいし」

○居間

居間にはいる

渡辺「ビール」

久美子「めずらしい。登校拒否、いや、登社拒否か

な」

テレビをつける音。ワイドショーの音。ビールを
食卓に置く音。

久美子「スーパーに行くところだったの。行っても
いい」

渡辺「ああ」

ビールを飲む音。

久美子「一緒に行く？」

渡辺「行かない」

久美子「おつまみないんだけど。急に帰って来るん
だから」

渡辺「麻衣子は？」

久美子「学校よ。誰かさんとちがって」

テレビを消す。

久美子「冗談、怒ったの。ごめんなさい。それより、

お花見、行かない。川沿いの桜が満開よ」

立ち上がる音。

久美子「どうしたの」

渡辺「書斎にいるよ」

久美子「えっ？」

○書斎

書斎のドアを開ける音。

渡辺（語り）「書斎は四畳ほどの広さで、窓が大きくとってある。東西に細長い書斎の東向きに横一間弱、縦半間ぐらいの窓がある。これは曇り硝子で外は見えない。北向きの出窓は、東向きの窓より一回り大きい。北側は半分以上窓だ。その窓と歩道の間は一尺ぐらいしかない。歩道の向こうは車道で、その向こうにフェンスがあつて、川が部屋と平行して流れている。川の向こうはたんぼ。

つまらない景色だけれども、見はらしはいい。それに、飽きのこない景色だと思う。普段はどちらの窓もカーテンを引いている」

ドアの外から

久美子「行って来るね。何か欲しいものある」

渡辺「別にないよ」

カーテンを引く音。

渡辺（語り）「カーテンを開けると、一斉に光が流れ込んでくる。部屋が外の世界と結ばれる。様々な人が窓を横切って行く。不思議に車の音は気にならない。意識すれば時々聞こえるが、ぼうつと見ているぶんには、窓は音のない世界である。突然、窓の下側を黒い頭が通ったりして、驚く。まるで窓などないように彼らは通りすぎていく。窓は私と外を隔てると同時に、私と外を繋いでいる。驚がゆっくりと窓に現れ、空気に身を任せ、田ん

ぼに消えた」

○居間

居間。

麻衣子「ただいま」

久美子「お帰り」

麻衣子「あれ、お父さん、今日はお休み？」

渡辺「ああ」

久美子「まいちゃん、驚いたでしょ。お父さんがいるんだもんね」

ビールを飲む音。

久美子「私も一杯もらおうかなあ」

ビールをつぐ音。

麻衣子「（少し離れて）お母さん、今日、塾でね分

数習ったよ」

久美子「そう、分数は難しいでしょう。この前のテストはどうだったの」

麻衣子「ハチバン」

久美子「三つも上がったじゃない。よく頑張ったわね」

渡辺「塾に行っているのか？　まだ、小学校三年生だろう」

久美子「みんな行ってるわ。遅いぐらいよ。それに、塾のことはあなたに相談もしたでしょう。麻衣子、やっと、十番以内になったのよ」

書斎のドアを開ける音。

久美子「（遠くから）あなた、もっと、マイとお話してよ」

○書斎

渡辺（語り）「部屋に戻ると、何時の間にか日は落

ちていた。窓の向こうにもう一つの私の部屋が現れていた。窓の外の私が私を見ている。夜の闇を背景に窓は鏡になった。怠けと窓の外への恐れが、私を飲み込んでいる。目を凝らすと、時計の針が逆だ。右手を上げれば、窓の外の私は左手を上げる。確かに、私は今まで、窓の外の世界で生きていたのだ。私とそっくりなのに、逆さまの私として。深夜白い鳥が窓をよぎった。こんな遅く、鳥が飛ぶとは。知らなかった」

○居間（日替わり）・会社への電話

掃除機の音。消えて、電話をプッシュする音。

久美子「営業の片山さんお願いします」

片山「はい、片山です」

久美子「渡辺ですが。今日もう一日休ませてもらいたいと」

片山「分かりました。体の調子でも」

久美子「いいえ、ちょっと、用事がありました」

片山「そうですか」

久美子「片山さん」

片山「えっ」

久美子「仕事の方で何か変わったことでも」

片山「いいえ、営業部は順風満帆ですよ、それとも

何か」

久美子「（慌てて）いいえ、ちよつと気になっただけです」

片山「今月からの、新しいプロジェクトのことで、

先輩もやる気満々ですよ」

久美子「そうですか、また、家の方にも遊びに来て

下さい」

片山「ありがとうございます」

電話を置く音。玄関の戸を開ける音。

麻衣子「行って来ます」

久美子「忘れ物ないね」

麻衣子「はあーい」

戸を閉める音。

○書斎

渡辺「窓の下を小さな身体がよぎって行く。あんなに大きなランドセルを背負っているとは今まで知らなかった」

書斎のドアが開く。

久美子「会社に電話しました」

渡辺「ありがとう」

久美子「どうしたの、あなた」

渡辺「休憩だよ。三十年近くも働いてきたから」

久美子「それならそれで、きっちり休みを取って」

渡辺「……」

久美子「ね」

渡辺「明日は行くよ」

久美子「ほんと」

渡辺 「ああ」

書斎のドアを閉める。

渡辺（語り） 「一日、窓から、空を見ていれば、時の流れがよく分かる。ああ、このように一日が過ぎていくのかと納得する。空は絶えず流れている。光と雲、それらが遊ぶ球形の天空は流れるように変化する。一日も、一年も、一生もこのように過ぎていくのだろう」

○書斎・窓・父

7 渡辺（語り） 「夜、窓に、6年前に亡くなった父が来た」

電車が高架を通る音。

渡辺（語り） 「ガード下の立ちのみの店で、カウンターに片手を置いて、ビールの中瓶を手酌で飲ん

でいる」

渡辺「父さん」

父「おう、お前か」

渡辺（語り）「窓の外と中が溶け合う。次の瞬間、

私は父のそばにいた」

渡辺「隣、いい」

父「ああ」

渡辺（語り）「父と二人きりで話した記憶がない。

いつも誰かいた。母か、兄か、姉か。父は黙々と

親の義務をはたしているような気がした」

電車が通る音。酒場の喧噪。

父「お前も、こんな処で飲む歳になったか。母さん

元気か」

渡辺「元気だよ。まだ、まだ、父さんところには行け

ないってさ」

父「いくつだっけ」

渡辺「七十二」

父「もう、俺の死んだ歳を越えたか……。お前いく

っだ」

渡辺「47」

父「俺が47の時は、どんな父親だった？」

渡辺「多分、今の俺とよく似ていると思うよ」

父「そうか……」

電車が通る音。

渡辺「父さんの一生って何だった」

父「最後でやっと係長だったからな。たいした一生じゃない。だが、お前達を育てた。それでいいじゃないか」

渡辺「俺は父さんの一生を聞いているんだよ」

酒場の喧噪。

父「おあいそ」

店員「あいよ、お疲れさま。760円」

渡辺「鳥瞰図って分かる」

父「町内の地図みたいなもんだろう」

渡辺 「うん。鳥の目で上から見下ろしたように書かれた地図。それが世の中でさあ。そこに細いピンで止められている小さな虫。それが俺だよ。いつ外れるか分からない」

父 「帰ろう」

渡辺 （語り） 「父の手がぼんと背中を叩いた」

酒場の喧噪が遠ざかる。

渡辺 （語り） 「身体が触れ合ったのはいつ以来だろう。窓に映っている私の顔は父そっくりだ」

○書斎（日替わり）

ドアをノックする音。書斎のドアが開く。

久美子 「片山さん」

渡辺 「片山……」

電話。

片山「おはようございます」

渡辺「やあ」

片山「どうされたんですか。奥さんも心配なさってるし」

渡辺「……」

片山「ご病気じゃないかとみんな心配しています」

渡辺「大丈夫」

片山「とにかく、明日、お宅に伺います」

渡辺「来ることはないよ。僕の代わりは君がやればいい」

片山「……」

渡辺「チャンスじゃないか」

片山「……。とにかく行きます。土曜日ですから、暇なんですよ」

渡辺「来なくていい、僕のことなんか心配しなくていいよ」

電話の切る音

渡辺「土曜日、彼は来なかった。僕の不在が、彼にとって都合のいいことに気づいたのだろうか」

○居間・昼・芥子粒ほどの虫

テーブルを片づける音。

久美子「明日は会社へ行くでしょ」

渡辺「……」

久美子「どうしたの」

渡辺「見ろよ」

久美子「なに？」

渡辺（語り）「目の前の磨かれた食卓の上に小さななにかが落ちてきた。交尾した芥子粒程の虫だった。私は光る羽をもった虫の交尾を食卓に顎をのせて見ていた。初めて見る最も小さな行為だった。この行為は生につながっていく、そして、同時に死にも。生と死が視界の中の小さな光景と重なる。行為の背後にも無数の生と死がある」

久美子「いやね」

渡辺 「どうして」

久美子 「だって……」

渡辺（語り） 「自分は確かに何かのコピーなのだ」

○書斎・闖入者

呼び鈴を何度も押す音

男 「渡辺さん、渡辺さん」

女 「いらつしやるんでしょ」

男 「いるのは分かっているんだから、開けて下さい。

開けなさい」

女 「窓が開くよ」

男 「仕方ないここから入ろう」

窓を開けて入ってくる。

渡辺 「止めろ」

女 「いるじゃない」

男 「宮本クリニックのものです」

女「さあ、車に乗って」

男「みんな話せばすつきりするさ」

渡辺「妻が頼んだのか」

女「ちがう。あなたが頼んだのよ」

男「美人だろ先生」

女「何言ってるのよ」

男「俺も治してもらったんだ。さあ、行こう」

渡辺「止める」

男「抵抗するよこいつ。自分の立場が何にも分かってないんだ。職のない人も多いうのにさ」

女「押さえて」

渡辺「止める」

女「止めるしか言えないのあなた。少し眠ってもらうだけよ」

男「馬乗りになるなんて、先生、刺激的だよ」

女「煩いね、あんたも眠らせてあげようか」

男「そりゃごめんだ。眠っている間に身ぐるみはがされて、いや、こいつの……」

男の声と、女の小さな笑い声が遠ざかる。

渡辺（語り）「気がつくのと、床に身を縮めて横たわっていた。彼らが入ってきた窓には、少しずつ暮れていく、いつもの空があつた。何が入って来て、何が出て行ったのだろうか」

○書斎・麻衣子↓女↓妻（何も無いじゃない）

子供の笑い声が遠くで聞こえる。次に子供の声が明瞭になる。

麻衣子「あいこでしょ」

女の子「グー、チョキ、パー」

麻衣子「勝ったあ」

女の子「もう一回」

麻衣子「グー、チョキ、パーグッチョパ」

女の子「あいこでしょ」

渡辺（語り）「麻衣子が女の子と向かい合って足を開いたり、閉じたりしながら遊んでいる。まだ日は高い。自転車に乗った若い女性が窓を横切る。」

髪が春の風になびいていた」

麻衣子の声だけが小さく聞こえてくる。

麻衣子「グー、チョキ、パー、あいこでしょ」

渡辺（語り）「いつのまにか麻衣子は一人で遊んで
いる」

麻衣子の声が消え。女が小さく歌う声が聞こえてくる。

女「ねんねこしやつしやりませ

寝た子のかわいさ

おきて泣く子の

ねんころろ 面にくさ

ねんころろん ねんころろん

渡辺「誰？」

女「あたし」

渡辺「知らない」

女「知らないって、冗談ばかり。膝枕、気持ちいいでしょ」

渡辺「うん。長い髪だね」

女「長い髪はきれい？」

渡辺「いいや、好きだよ」

女「さわっていいのよ」

渡辺「濡れているね」

女「夜露に濡れたの」

渡辺「何処から来たの？」

女「何処って……。私は、あなたの中にいるおんなよ」

渡辺「おんな」

女「だから甘えていいのよ。」

ねんねこしやっしやりませ

寝た子のかわいさ

おきて泣く子の

ねんころろ 面にくさ

ねんころろん ねんころろん

渡辺「ねんころろん ねんころろん」

女「ねんねこさっしやりませ

今日は二十五日さ

明日はこの子のねんころろん

宮参りねんころろんねんころろん

女の歌声が消える。

渡辺「何故生きなければならぬのか。女に尋ねてみた。不意に涙が一筋流れた。女は何も答えなかつた。涙のあとを細い指で優しく撫でた。(間)。

女が消えた窓には深い闇が落ちていた。女の長い黒髪のような、窓に伸ばした手を溶かすような……。深い闇が落ちていた」

ドアの開く音。

久美子「眠っているの」

渡辺「いいや」

久美子「いいい？」

渡辺「……」

カーテンを引く音。

渡辺（語り）「久美子は、カーテンを閉め、ガウンを脱ぎ、私のそばに滑り込んできた。ガウンの下には何もつけていなかった」

久美子「誰と話してたの？」

渡辺「誰と……」

久美子「女の人？」

渡辺「いいや、父さんだよ」

久美子「お義父さん……」

渡辺（語り）「この時間には鳥が飛ぶ。ゆっくり、

窓を横切る」

久美子「ここで何をしているの？」

渡辺「窓を見ている」

久美子「窓？ 窓の外に何が見えるの」

渡辺「何って……」

久美子「もう、いいかげんにして」

立ち上がる音。カーテンを引く音。

久美子「（叫ぶ）何もないじゃない」

渡辺（語り）「薄暗がりの中で白い身体が浮かんだ。

久美子は窓に映った自分の裸に驚き、胸を隠した。その時、白い鳥が、久美子の身体をかすめるように飛んだ。一瞬の夢のように……」

○書斎（日替わり）・1ヶ月経過・5月初旬

玄関の戸を開ける音。

麻衣子「お父さん行ってきます」

渡辺（語り）「娘が学校へ行く。その後、妻が出掛ける気配がする。家のローンだけでも払うためと言って、働きに出た。通り過ぎる時、必ず後ろ髪を引かれるように窓を振り返る。居間に行き、用意してある朝飯を食べる。新聞は読まない。テレビも見ない。排便を済ませ、部屋に戻る。生きるための最低限の用を、後に続く無駄な時間の為に出来るだけ節約する」

書齋の戸を開ける音。

渡辺（語り）「窓を眺めている間に、窓の外の私を次々と失っていった。上司は一度だけ、電話にでるように妻に言ったが、それだけだった。解雇通知は、その後すぐに送られてきた。同僚からも電話一つかかってこない。こうして会社の中の私は失われた」

渡辺（語り）「駅へ急ぐ人の中にも私はいない。ただ、彼らの後ろ姿を窓から、眺めているだけだ」

渡辺（語り）「何時もいる筈の電車の中の不在」

渡辺（語り）「駅の雑踏の中の不在。誰も気づかない、誰も知らない私の不在」

渡辺（語り）「（遠くで雷鳴）灰色の空に稲妻が走った。次々に稲妻は空を切り裂く。激しく雲が動く。（激しい雷鳴）叩きつけるような雨が、窓を打つ。（雨の音が止む）。やがて空は怒りをおさめた。煙るような雨が降っている。五月の空は水滴を含んでいる。会社へ行かなくなって1ヶ月経った」

○居間（娘との夕食）

居間。

電子レンジの音。

渡辺（語り）「娘と夕食をとる。火を使うことを禁じられている娘に出来ることは、皿にラップを巻いて、電子レンジでおかずを温めるぐらいのことだ。それでも、いじらしいほどに一生懸命、私の世話をする。娘を眺めながら、この中にも自分がちりばめられているのだと思う。次から次へと、自分は何処まで続いて行くのだろうか？」

渡辺「マイ、気をつけて」

麻衣子「はあーい。よいしょと」

渡辺（語り）「自分の身体にも無数の他者が生きて
いる。顎の下の小さなほくろ。これは誰のものな
のだろう」

麻衣子「いただきます」

渡辺「いただきます」

麻衣子「おいしい？」

渡辺「おいしいよ。マイ、塾はどうだ？」

麻衣子「止めたの。嫌いだから」

渡辺（語り）「マイが爪をかんでいる。何年も前に

おさまっていたはずの癖が」

渡辺「（咎める調子で）マイ」

麻衣子「（驚いて）えっ」

渡辺「いいや、なんでも」

麻衣子「（弾んで）テレビゲームしていい」

渡辺「いいよ」

テレビゲームの音。

麻衣子「よし、よし、やったあー。お父さんもやる。」

渡辺「お父さんはいいよ。マイが上手だから見ているよ」

麻衣子「一緒にやろうよパパ、かんたんかんたん、

Aボタンで逃げて、Bで攻撃。パパ、Aボタン」

ゲームオーバーの音。親子の笑い声が、小さくなり消える。

○書斎・外套

電車が高架を渡っていく。

父「結局48年間役所に勤めた」

渡辺「永年勤続表彰三回」

父「特に趣味もなかった。色々やったけど長続きしない」

渡辺「釣りなんかやってたじゃない」

父「一年ほどき。釣り竿持って、川ん中で、俺は何のためにこんな事をやってるんだと思ってしま
う」

渡辺「結局は仕事？」

父「それだけさ。失敗もなかったが、出世もしない。

お前、ゴージャリの外套という小説を知っている
か」

渡辺「知らない。小説なんて読まないから」

ビールをつぐ音。

父「わしもそうだが、あの本だけは何度も読んだ。

あれはねえ、俺のことを書いた本なんだ。主人公
はロシアの小役人。公文書の清書という人から見
たらつまらない仕事を熱愛し誇りを持っている」

電車が高架を通る音。

父「今日はもう一杯もらおうよ」

店員「同じので」

父「ああ、それと息子にも同じの。彼にとって外套を新調することは、そうだなあ、今のサラリーマンが家を建てるようなものかなあ。それ以上かもしれない。そんな思いの外套を盗まれてしまう。それが原因で死ぬ」

渡辺「盗まれる、死ぬ。大事おおごとだね」

父「物語はそれで終わりじゃない。夜な夜な、役人の姿をした幽霊が現れて、盗まれた外套を探し始める」

店員「はいよ、中瓶一本」

電車が高架を通る音。

父「ただ俺は、アカーキイ・アカーキエヴィチのように外套を新調することはなかった。だから、外套を盗まれることもなかった」

渡辺「アカーキイ・アカーキエヴィチ。長い名前を良く覚えたね」

父「親をからかうな」

笑い声がふっと消える。

書斎のドアーごしの会話。

久美子（外）「あなた、お父さんの法事」

渡辺（内）「行かない。同じことを何度も言った」

久美子（外）「一緒に法事に行って、お願い。そこ

から出なきや、あなたも私もマイも駄目になる

わ

渡辺（内）「お前とマイで行ってくれ」

久美子のすすり泣く声。

久美子「お願い」

○ 渡辺の実家・法事

離れて、法事のざわめき。読経。

渡辺（語り）「窓の中の父はいつも機嫌がよかった

のに。写真に閉じこめられた父は、少し不機嫌な顔をしている」

洗い物をする音。

母「孝、元気そうじゃない」

久美子「ええ、お母さんこちらはやりますから」

母「それじゃお願いして」

法事のざわめき

母「もう、6年、早いもんね」

姉「お父さん、71才か、少し早かったかなあ。寂しいだろうな、お母さん」

母「そりゃ何年経ってもね。麻衣ちゃんおばあちやんとこへおいで」

兄「（少し離れて）お前なんか、親父のこと何にも知らないじゃないか。どうして親父がかわいそうなんだよ」

渡辺「そんなこと、言っていないよ」

兄「そう言ったじゃないか」

渡辺「弟だからって、いつも我慢してきたんだ。それに、俺、何も言っていない」

兄「何も言っていない。さっき、俺ばかり割をくっているって言ったじゃないか。我慢してきたあ、親もみずに、家を出て気楽にやってるのは何処の誰だ」

食器が倒れてかち合う音。

母「止めなさい、父さんの前だよ」

○ 駅・帰路

駅の雑踏。電車が入る音。ドアが開く音。

渡辺（語り）「麻衣子が眠ってしまった。眠ったマ

イは私の腕の中で急に重くなった」

電車に乗り込む音。

○車内・帰路

久美子「どうして義兄さんともめたの」

渡辺「癖」

久美子「癖？」

渡辺「父さんの癖。父さんは人に会うと、人差し指

と中指を立てて、ヨツと言う癖があつた」

久美子「私、知らない」

渡辺「兄貴も知らないって言った。それどころか嘘だつて言った。俺はお前よりずっと長く親父と住

んでいるんだって。それから話がおかしな方に：

……。そうか、お袋に訊けばよかつた」

久美子「もし、お母さんも知らないって言ったたら」

渡辺「……。お袋も知らないって」

久美子「お母さんは何も言わなかつたわ。お母さん、

台所で目頭を押さえた」

渡辺「久しぶりにあつた兄弟なのに喧嘩になつちま

つたからなあ」

久美子「違ふと思う」

渡辺「違う？」

久美子「お義父さんの癖なんてもう確かめようがないのよ。そんな話がお義母さんには悲しかったのよ。きつと」

電車が止まる音。人が立ち上がる音。

久美子「座る？」

渡辺「いいよ、君が座れば」

久美子「マイをもらおうわ」

渡辺（語り）「二人から離れて、扉に肩を預けた。

窓の外に父がいた。流れる闇の中に、ぼんやりと背中が浮かび上がった。いつもの立ち飲みのカウンターに肘をついて……。不意に私の方を振り返り、ヨオという風に人差し指と中指を立てて、サインを送ってきた」

車内。急に電車が止まる。人がざわめく気配。

渡辺（語り）「突然冷たい風が吹き込んできたよう

に窓に浮かんでいた車内の様子が変わった」

電車が動き出す。

渡辺（語り）「久美子も麻衣子もいない。電車は何事もなかったように動き出した。誰一人知らない他人の中に、扉に肩を預けた私がいる。通過していく夜の景色を眺めている。窓の中で私に覆い被さるようして、吊革を持った男の顔が、不意に見覚えのある顔に変わった。驚いて周りを見渡すと、小学校6年A組の同級生達が、吊革を持って、電車に揺られていた」

渡辺「和田か？」

和田「渡辺……。お前、どうして、こんな処にいるんだ」

渡辺「三十年近く通っているんだよ、この電車で。」

お前達こそ、どうしたんだ。みんないるのか」

和田「いるよ、みんな。（間）途中で降りたやつもいるがね。ほら、山田なんか吊革を持つ手が消えているだろ。バブルの時調子にのりすぎてさ、そ

のつけで、首をくくったんだ」

市川「そうだよ、夢なんか見るからだ。小さくても
確かな生活が大事なんだ。どうせ人生なんて、一
方通行の電車に乗っているようなものさ。行き着
いた駅で、みんな、ふっと消えるんだ」

渡辺「市川か……」

市川「人のことを言えた柄じゃないか俺も。優等生
なんて、井の中の蛙そのものさ。小学校の先生が
行き止まり、その先は何にもない。そういえば、
渡辺は卒業アルバムに希望って書いてたなあ。教
えてくれよその中身。今なら言えるだろう」

渡辺「忘れたよ」

市川「嘘だ。教えろよ」

和田「止めるよ、市川、久しぶりに会ったんじゃない
いか」

市川「……」

渡辺「優先座席で眠っているのは岡田先生か？」

和田「保険の勧誘に、教え子の所を回っているんだ
って。今日も誰も入らなかつたってさ」

市川「お前、入ってやれよ」

渡辺 「2つも入っているんだ」

窓を叩く音。

渡辺（語り） 「藤波……。丸坊主の、少し斜視の子

供が窓の外から私を見ている」

和田 「誰？ 俺、知らないよ」

市川 「俺も知らない」

渡辺 「藤波だよ」

市川 「そうだ。大人しい奴だったから、忘れてた」

和田 「けどあいつ五年生の時、交通事故で……」

窓を叩く音。

藤波 「よお」

渡辺 「藤波か」

藤波 「こっちへおいでよ」

窓を開ける音。風の音

藤波 「大丈夫だよ、飛ぶんだ」

渡辺 「無理だよ」

藤波 「大丈夫。僕にも出来たんだから、勇気を出して」

風の音。

渡辺 「行くよおお」

風の音が止む。

○藤波の家

渡辺（語り） 「窓の闇の向こうに、懐かしい風景が開けていた。小さな私がそこにいた」

少年時代のイメージ。小さな足音。

藤波 「渡辺君、僕の家に来る？」

渡辺（子供） 「ああ、いいよ」

藤波「宝物を見せてあげるよ、でも、誰にも言っちゃだめだよ。昼間は家の人は誰もいないんだ。粉末ジュース、買って行くね」

引き戸を開ける音。

駄菓子屋のおばあちゃん「二等は三枚。あんたはスカ。泣いたらだめ。エビせん一枚あげるからな」

藤波「粉末ジュース二つ」

駄菓子屋のおばあちゃん「あいよ」

渡辺（子供）「僕が払うよ」

藤波「いいよ、今日は」

渡辺（子供）「それじゃ僕は、キャラメルを買うよ」

引き戸を閉める音。

渡辺（語り）「藤波は一家四人で6畳一間のアパートに住んでいた。窓際に小さな文机があった。西日が、すり減っていたが、清潔な畳の目にさして

いた。彼は、慎重に押入の戸を開けた。そして、大切なものを扱うように、雑誌を何冊か引き出した」

藤波「すごいだろう」

渡辺（子供）「日の丸っていうの」

藤波「そうだよ、殆ど揃っているよ。これを見るよ、隼だよ。これなら知ってるだろう、零戦。次は大和だ。全長二百六十三m、幅三十八・九m、排水量六万四千トン、十五万馬力、速力二十七ノット、七千二百海里も航海が出来るんだ。主砲は大口径四十六・三、射程距離4万m、40kmだよ、すごいだろう」

渡辺（語り）「畳の上で、丁寧に彼は雑誌をめくった。細くて長い指」

藤波「君はこんなのは嫌い？」

渡辺（子供）「いいや、かっこいいと思うよ」

藤波「そうだろう、ドキドキしない」

渡辺（子供）「そうだね」

藤波「（はしゃいで）ジュースを飲もうか？」

渡辺（子供）「キャラメルは」

藤波 「一つもらうね」

遠くで、「傘修繕、こうもり傘修繕の声」が聞こえてくる。

藤波 「俺、劇画も描いてるんだ。誰にも言っちゃだめだよ」

渡辺（語り） 「細かく丁寧に描かれた劇画。彼の所有するおよそ畳一枚分の空間は、驚くほどに清潔だった。埃一つなかった。細くて長い指と、清潔な彼の場所、それらはやがて紙の中で一本の線になり、きらめく零戦の姿に変化していった」

渡辺（子供） 「帰るよ」

藤波 「それじゃ、一緒に君んちまで行くよ」

○道路・渡辺の家への

並んで歩く足音。自転車が二人を追い抜いていく。

渡辺（子供）「キャラメル、あげるよ」

藤波「いらない」

渡辺（子供）「買い食いしたら、お母さんにしか
られるんだ。ちよっと寄っていく？」

藤波「いやだよ。今日は帰るよ」

渡辺（子供）「ちよっとだけだよ。君に見せたいも
のがあるんだ、俺の宝物。揚羽蝶」

藤波「揚羽蝶」

渡辺（子供）「蛹になった。もうすぐだ」

藤波「アゲハじゃないかもしれない。揚羽蝶なんて
見たことないもん」

渡辺（子供）「昆虫博士のター君が言っていたから
間違いないよ」

渡辺（語り）「少し不安になった。美しいアゲハの
姿を夢見て育てていたんだから」

○ 渡辺の家

階段を上がり、戸を開ける音。

藤波 「大きいね」

渡辺（子供） 「アゲハに間違いないだろ？」

藤波 「うん」

渡辺（子供） 「蝶になったらね、空に放してやるんだ」

藤波 「きれいだろうなあ」

渡辺（子供） 「明日の朝おいでよ、きっと、蝶になっ
っているよ。一緒に空に放してやろう」

藤波 「うん、来るよ。その時、スケッチしていい」

渡辺（子供） 「いいよ」

○車内

車内。電車の音。

渡辺（語り） 「和田……。市川……。みんな、いなくな
った。電車は何処を走っているんだろう」

（間）

渡辺（語り）「朝、半分の羽が抜けきれずに死んで
いる揚羽蝶を見た時、二人は一瞬言葉を失った。

枯れ葉のような殻から抜け出た羽の美しい模様が、
羽化できなかつた蝶の運命のように思えた」

藤波「もう少しなのにね」

渡辺（語り）「藤波の目に小さな雫のような泪が光
った」

藤波「大人になるのは、揚羽蝶には命がけなんだ
ね」

音楽。電車の止まる音。

麻衣子「（遠くで）お父さん、（近くで）お父さ
ん」

渡辺「（我に返って）マイか」

電車のドアが開く。電車を降りる。

久美子「疲れた？」

渡辺「大丈夫。マイは眠くない？」

麻衣子「眠くない」

渡辺（語り）「マイが私の手を握った。私たちはどこにでもいる家族のように三人肩を並べて家路に
ついた」

○書斎（日替わり）・一月半経過・5月下旬

渡辺（語り）「法事から2週間過ぎた。相変わらず
窓を見る生活が続いている。何日も窓に誰もやつ
て来ない。昼と夜が振り子のように繰り返される。
窓は少しずつ変化している」

玄関の戸が開く音

渡辺（語り）「妻が帰ってきた。今日は随分遅い。
部屋の電気を消す。もう一つの部屋は消え、十数
羽の白い鳥が飛んでいる。次々に闇をよぎるよう
に旋回する」

書斎のドアを開ける。

○ 渡辺家・居間

渡辺（語り）「水を飲み居間を通る。電気をつけ
たまま、服も着がえずに、卓袱台に顔を伏せて妻
は寝ていた。化粧を溶かして流れた涙の跡を見た。
飲めない酒をのまされたようだった。不意に自分
さえいなくなればと思った。そうすれば、きまり
がつくのだ。一区切りつくのだ」

久美子「起きていたの」

渡辺「うん」

久美子「（強く）行かないで、お酒、飲もう」

久美子、立ち上がろうとして、ふらつく。

渡辺「僕がするよ」

冷蔵庫の開ける音。コップを並べ、ビールの栓を
抜く。

久美子「（ビールをつぐ音）乾杯」

コップがふれあう。

久美子「何に、乾杯？」

渡辺「さあ、何だろう」

久美子「あなたが手に入れたあなただけの生活に乾杯」

渡辺「僕だけの生活……」

久美子「私には分からないけどそんな感じがするの。

母さんは病院へ連れて行きなさいって言うけど、私は、今のあなたが本当のあなたのような気がするの。ビール飲まない。しらふじや辛いでしょ」

渡辺、ビールを少し飲む。

久美子「一日中、窓を見ているの？　なぜ？」

渡辺「それしかできなくなってしまった。幸せでも、不幸でもない。ただ、窓の中に僕だけの風景がある」

久美子「世間には関心がないわけ」

渡辺「（静かに）僕には関係がない」

久美子「私も、麻衣子もそこにはいないのね。私はいい、麻衣子はどうなの？」

渡辺「連れていけないよ。そこは僕だけの風景なんだから。誰も入れない」

久美子「そんな窓なら私が壊してあげる」

久美子と渡辺が立ち上がる音。

渡辺「止めてくれ」

久美子「私は14年間、あなたの何を見ていたの」

二人脱力したように座る。渡辺、ゆっくりと立ち上がる。

渡辺（語り）「立ち上がった私の背に久美子は語りかけた」

久美子「独り言を聞いて。独り言なら聞けるでしょ」

渡辺（語り）「振り向くと、久美子は子供のよう
に膝小僧を抱えて、身体を小さく揺らしていた」

久美子「私の夢は平凡な主婦。友達は、久美子は結
婚願望だからって笑ったわ。あなたと初めて言葉
を交わしたのは入社試験の日ね。会社への道を訊
いた私に、俺、その社員って、屈託なくあなた
は言ったわ。それにしてもあの日はよくあなたと
会った。トイレに行ったら会うし、昼ご飯に行っ
たらまた会う、喫茶店、そこにもいた。（笑う）
帰りの電車でも会った」

渡辺（語り）「遠い昔話のように思えた」

久美子「長い間子供が出来なかった。マイが生まれ
た時、やっと一人前の家族になった気がして嬉し
かった。マイの写真ばかりがアルバムの中に増
えていく。マイが歩いた、マイが逆上がりが出来
た、マイが10m泳げた、マイが……」

渡辺（語り）「久美子は一人一人のマイを探すよう
に語り、ふっと、マイの姿を見失ったように黙っ
た」

(少し長い間)

久美子「あらためて幸せなんて思わなかった。当然のようにあなたが働いて、当たり前のように毎日帰ってきて、一日が平凡に過ぎていく。それがあつけなく崩れてしまう。私の幸せってこんなにもろいものだったの」

ビールをつぐ音。

渡辺「ビールはもうよせよ」

久美子「強くなったのよ私」

コップを置く音。

久美子「ローンもあるし、パートに出ようかなあつて言ったら、あなたは麻衣は友達と上手いかなあつて言ったら、あなたが少しあるから、家にいて欲しいって言ったわ。麻衣には沢山お友達がいるのよつて、私、笑ったわ。去年の夏、麻衣は水着のまま帰ってきて

た。服を隠されてね。私は濡れた麻衣の身体をし
っかりと抱きしめることが出来た。あの時のあな
たは何処へ行ったの」

渡辺（語り）「不意に久美子は私の顔を見上げた」

久美子「どうして、いじめるの」

渡辺「……」

久美子「お願い、戻ってきて、前のように一緒に。

向こうに行かないで。戻ってきて」

渡辺「風邪をひくよ」

久美子「戻れないなら、消えて欲しい（堰を切った
ように泣く）。どうしていじめるの」

渡辺「……」

久美子「お酒飲まない？」

渡辺（語り）「膝の間に顔を埋め泣いている妻を見
る。もう若くない女。今、妻の肩に手を置くこと
が出来たなら。（間）。自分さえいなくなれば、
一区切りつくのだ」

突然、久美子が書齋に走る。追いかける渡辺。
もみ合う二人。

○ 渡辺家・書斎

久美子「あなたが見ているのはみんな嘘よ」

久美子が窓を割る。吹き込む風の音。遠くで久

美子を呼ぶ麻衣子の声。

麻衣子「ママ、ママ」

久美子「マイ、来ちゃダメ」

風の音。止む。間

渡辺（語り）「飛び散ったガラスの破片を拾う。ジ

グソーパズルのピースを集めるように」

寺本「（小さく）渡辺君」

渡辺「誰？」

寺本「渡辺君」

渡辺「誰？ 痛い」

渡辺（語り）「血が一滴ガラスの表面を伝う」

寺本「渡辺君」

渡辺（語り）「ガラスの破片の中に寺本さんが見える。悲しそうな目で私をじっと見ている」

渡辺「寺本さん」

寺本（子供）「渡辺君、これはあなたが私につけた傷」

渡辺（語り）「寺本さんの指からも、真っ赤な血が一滴流れた」

寺本「帰れるよ、今なら」

○寺本さんの家

走る足音。追いかける足音。

母「英子、おトモタチか」

寺本（子供）「うん、渡辺君」

母「仲良う遊んだってや」

渡辺（子供）「はい」

母「めずらしいなあ、英子がトモタチ連れてくるて。

それも男の子やて（笑う）」

寺本（子供） 「渡辺君、桜公園へ行こう」

二人の足音が遠ざかる。

○公園

風の音。

渡辺（語り） 「桜が吹雪のように風に舞った。薄い紅を引いたような花びらだった。舞い上がる桜の花びらの中に寺本さんは立っていた。小首を傾げてまぶしそうに僕を見た」

寺本（子供） 「どう、探偵さん」

渡辺（子供） 「探偵？」

寺本（子供） 「私が朝鮮人かどうか調べに来たんでしょ」

渡辺（子供） 「違うよ！」

寺本（子供） 「いいの、朝鮮人よ。さっきのがお母さん。白いチマ・チョゴリ、とっても素敵だったでしょ」

渡辺（語り）「私は探偵役をかって出た。優等生で、可愛くて、優しい彼女を傷つけないという気持ちがあつた。寺本さんを苛めたいという残酷な気持ちがあつた。心に小さな傷が残っている。小さいが消えることのない傷が。きっと寺本さんの心にも」

風の音が小さくなる。

○渡辺家・書斎・割られた窓

渡辺（語り）「私も寺本さんも、とつても年をとっている。でも、小首を傾げて眩しそうに人を見る癖は少しも変わらない。寺本さんは、白いチマ・チヨゴリを着ている。二人以外誰もいない」

寺本「母さんのチマ・チヨゴリ、結局は一度も着なかつた。着て欲しかつただろうなあ母さん。渡辺君、国って何。私の生きている場所が、私の国。それでいいでしょ」

渡辺（語り）「寺本さん……。二人の小さな傷が窓

の闇に溶けていく」

イムジン河の前奏が入る。

（歌う）

イムジン河水清く　とうとうと流る

水鳥自由に　むらがり飛びかうよ

我が祖国南の地　思いははるか

イムジン河水清く　とうとうと流る」

間奏。

寺本「渡辺君、この歌、知っている？」

渡辺「知っている。好きな歌だよ」

寺本「鳥はいいなあ。自由に飛べるから」

寺本（歌う）「

北の大地から　南の空へ

飛びゆく鳥よ　自由の使者よ

誰が祖国を二つに　分けてしまったの

誰が祖国を　分けてしまったの」

渡辺「俺、あの後、君に手紙を書いた。でもね、出さなかった。長い間持っていたんだけど、いつの間にか紛れてしまった」

寺本「なんて書いたの」

渡辺「殆ど忘れてしまったけれど、ごめんと、それと……」

寺本「それと……」

渡辺（語り）「ひび割れた窓に、指で、好きだと書いた。寺本さんの姿は消え、闇を呑み込んだような窓があった。帰ることの出来ない昔があった」

「イムジン河」が小さく流れ、消える。

○道路

自転車の音。

渡辺（語り）「次の日、ポリ容器を荷台にくくりつけて、私は久しぶりに自転車で乗って外へ出た」

自転車の止まる音。

渡辺「ポリ容器にはいるだけ、ガソリン入れてよ」

店員「レギュラーですか」

渡辺「いや、ハイオクにしてくれる」

店員「ガス欠ですか」

渡辺「うん、(間)南山寺って、どう行ったらいいの。石楠花で有名な寺なんだけど」

店員「北へ真っ直ぐですよ」

渡辺「(明るく)ありがとう」

自転車の音。鳥の声。

渡辺(語り)「15分ほど走ると、白爪草が今が盛りに咲いていた」

自転車の止まる音。

渡辺(語り)「ポリ容器を側に置いて、白爪草を見

ていた。とうとうここまで来てしまった」

鳥の声。

渡辺（語り）「ポリ容器をつかんだ。そして、ガソ

リンを被った」

ライターの音。

渡辺「いくらこすっても火がつかない。（狂ったよ

うに笑う）油臭い男が出来ただけじゃないか」

渡辺（語り）「笑い疲れて、仰向けに倒れると、小

さな鳥が鳴きながら、真っ青な空に吸い込まれて

いくのが見えた」

鳥の声。

○道路

渡辺「行く当てもなく、陽光の中をひたすら自転車

を走らせた。そして、道に迷った。何処をどう走ったのか、知らない住宅団地の中に出てしまった。主婦が子供の手を引いて、見知らぬ油臭い私をじっと見ている」

自転車の音。

渡辺（語り）「窓がある。男が私を見ている。あれは私だ。窓の数だけ、閉じこめられた私の破片が散りばめられている」

車とすれ違う。

渡辺（語り）「家の近くだと思いが……。家の近所で道に迷う。近すぎて、よく知りすぎていて、だから、迷路に落ちる。自分と逸ぐれたような不安を感じる」

走る自転車。走る、走る。車の急ブレーキの音。

渡辺（語り）「そこは国道だった。妻の勤めている
スーパーの看板が見えた。」

○スーパー

スーパーの喧噪。

渡辺「自動ドアの向こうに妻がいた。若い女の店
員と並んで、狭い箱の中で背を向けてさかんにレ
ジを打っていた」

久美子「ありがとうございます。3569円にな
ります。5000円から頂戴します」

レジの音。

渡辺（語り）「そばを通ったのに妻は気づかない」

スーパーの喧噪。

渡辺（語り）「スーパーの棚は、美しい野菜や果物

で溢れていた。私はその中からレモンを一つ手にとった」

カウンターにレモンを置く。

渡辺（語り）「カウンターにレモンを置いた」

久美子「いらっしやいませ……」

渡辺（語り）「妻は私とレモンを等分に眺めた」

久美子「52円……。100円からいただきます。」

（声を潜めて）出かけてきたの」

渡辺「ああ、道に迷っちゃった」

久美子「（小さく笑う）今日は早く帰るわ」

渡辺（語り）「レモンの重みが掌の中にある。」

（間）。明日はなにかが変わるかもしれない」

雨の音。

○渡辺家・書斎

渡辺（語り）「あれからずっと雨が降っている。少

しずつ、雨の気配が日々のうつろいに漂い、季節は梅雨に入ったのだろう。雨は私の周りを静かにした。椅子に坐って窓を眺める時間が少なくなつた。殆ど床に転がっている。もう、夢を見ることもない」

高架を走る電車の音。

○居酒屋

渡辺（語り）「父も、店員も、客も、誰もいなかった。振り返ると、狭い路地に、霧のような雨が降っていた」

雨の音。

渡辺（語り）「今まで、時が過ぎ去って行くと思っていたが、限りなく過ぎ去って行くのは自分の方だと気づいた」

雨の音が止む。川の流れる音。

渡辺（語り）「暗闇の中、手摺りもない、幅50cmほどの橋を渡っている。川の向こうに、巨大な桜の木がある。薄い紅を引いたような花びらが闇の中を次々に舞い落ちている。木の下に小さな女の子の影が見える。マイだろうか？ 寺本さんだろうか？。声をかけようとしたら、影はふっと消えた」

川の流れる音が消える。

○窓のない場所

渡辺（語り）「ここは何処だろう？自分の体の中にいるような奇妙な感覚が身体を浸している。自分の中に自分がいる。何時からここにいるのだろうか。この場所には窓はない。夢と現実の境もない。深い闇が果てしなく続いている。やっと誰も訪れてこない場所に来た」

小さく電話の音がする。

渡辺（語り）「時々電話のベルが鳴る。誰がかけてくるのだろうか？ 数回鳴ると、ふっと、止む」

了

平成十一年四月十六日第十四回創作ラジオドラマ脚本コンクール 佳作入選

作品 4 突然ジークのように [目次へ](#)

登場人物

吉田 真知^まち … 高校 2 年生。

東^{ひがし} 治^{おさむ} … 真知の同級生

久美子 … 真知の同級生

父 … (45)

母 … (40)

吉田 亘^{わたる} … (真知の弟 中学 1 年生)

ハチ先生 (43)

カポネ先生 (32)

真知 (語り) 「寝転がって、安部公房の「飛ぶ男」

を読む。氷雨本町二丁目四番地の上空を人間そつくりな物体が南西方向に滑走していった。時速二、三キロ、読み間違いじゃないかと読み返す。歩くより遅いスピードで男は飛んでいる。飛ぶ、スーパーマン、ピーターパン、それは人の夢だ。だが、歩くより、遅く飛ぶとは、それでも、夢だろうか。夢でも、痛ましい夢だと思う。何かを左手に持ち、耳に当てがっている。唇の動きも、誰かに喋りかけてる感じ。携帯電話だ。荒い晒しのパジャマを着て、電話で話しながら、時速二、三キロで飛ぶ。すつごく無防備だ。案の定、不眠症の女に空気銃で撃たれた。

深く考えない。漫画を読むように安部公房を読む。それが結構楽しい。どんなに読み違えてもかまわない。誤解、誤読は私の自由だ。安部公房は、何を真剣にこんなことを書いているのだろうかと思うながら、主人公の保根治と言う名前に笑ってしま

う。
方舟さくら丸の巨大な核シエルターの中心には、むき出しの巨大な便器があった。そこに座ってお

しっこをしたら爽快だろうなあ。

密会と言う小説のラスト。人間の形からますます遠ざかって行く、骨が溶けて行く病気の少女を抱きしめて、明日の新聞に先を越され、僕は明日と言う過去の中で、何度も確実に死につづける。やさしいひとりだけの密会を抱きしめて。意味もなく、そこで、私は、声をあげて泣いていた。

飢餓同盟。花井太助のように、尻尾が生えていなかた心配になって、そつとお尻を触って見る。そして、砂の女。さらさらと落ちて来る砂の音だけが残った。まだ、二人は砂の中にいるのだろうか。そこには、そつけなく、乾いた砂のような幸せがある。

ページを飛ばしてもいい。分からない言葉はいい加減に読み飛ばしてもいい。私は国語も、文学も全く好きじゃない。ただ、青い背表紙の安部公房の文庫本は好きだ。好き勝手に開いて、一行だけ読む事があれば、夜明けまで読みつづける時もある。そして、読むと同時に忘れてしまう。ただ、青い背表紙の小さな本の中で、彼は次々にドアを

開けて行く。私は、何も考えずに、彼が開けてくれる世界をさ迷うのだ。そうして、いつも、いつの間にか小さな眠りが私を包む。

これはそんな生活を繰り返していた高校時代、1994年1月から始まる物語だ。

タイトル「突然、ジーコのように」

○吉田家・真知の部屋（昼）

父「真知、始まるぞ」

SE テレビからサッカーの実況。

真知「はっ、そう言えば、お父さん、サッカーを見ようって、張り切っていたっけ」

SE 真知が障子を開ける。サッカーの実況が少し大きくなる。

○吉田家・居間（昼）

父「今日は、日本中がサッカーを見ているんだよ」

真知「興味ないなあ」

父「ブームに乗り遅れるぞお前」

真知「乗り遅れたっていいもん」

父「話が合わなくなるぞ」

母「真知の高校、サッカーで有名なんだろう」

真知「うん」

母「ミカンを食べながら、テレビを家族みんなで見
るって久しぶりだね」

父「大晦日も同じことを言っていたなあ」

真知「わたる亘がいないよ」

母「また、コーラスの練習だろう」

父「男のくせにコーラスなんか」

真知「それに音痴なんだよ、あいつ」

父「俺に似たのかなあ」

SE ドアを開ける音。

亘「只今」

母「帰ってきた。(笑いながら)音痴のコーラス部
員なんて言ったらダメだよ」

三人が笑う。亘が部屋に入ってくる。

亘「何だよ、みんな笑って」

真知「べつに」

父「亘、こっちへ来い。サッカーを見よう」

亘「いいよ」

父「来いと思ったら、もう、始まったぞ」

亘「お父さん何時から、サッカーのファンになったの？」

母「お父さんが好きなのお相撲なのにねえ」

父「煩い、サッカーだ。これからは、サッカーだ」

テレビの声「オフサイドです」

父「オフサイドって何だ」

真知（語り）「居間に家族4人が集まる。サッカー

なんか誰も詳しく知らない」

亘「あの鳥籠の中にいる人、ボールを手で触っているよ」

父「ジーコって、サッカーには女もいるのか」

母「大きな大人が、ボール転がして馬鹿みたい」

SE 母の立ち上がる音。

真知（語り）「最初に一ぬけたのは、母だった」

父「おい、時代から取り残されるぞ」

亘「勉強してくる」

真知（語り）「お父さんは、ビールを飲みおわると、炬燵にもぐったまま眠ってしまった。お母さんは、靴下の内職を始め、弟は、隣の部屋で、下手なコーラスの練習を始めた」。

SE 巨のコーラスの練習。

真知（語り）「私だけが、ポケットと口を半開きにして、興味のないサッカーを見ていた。その時、テレビの画面が、異様な動きを見せた。外国人が激しく審判に抗議している。それは、私には一瞬、滑稽にみえた。どうでもいい事に、何故そんなにこだわるのと言いたかった。しかし、彼の背中が、私の中の何かを震わせていた。その人の名はジーコ。そして、何かが起こった。一瞬の空白。嘘だと言う風に、信じられないと言う風に、カズが跪いた。むき出しの脛が痛いだろうと思う。それよりも何が起こったのだろう。ジーコが、さっさと引き上げて行く。まるで、いたずらっ子が、捨てざりふを残して、去って行くようだ」

父「哀れだなあ」

真知「お父さん、起きていたの」

父「商売道具に唾をかけるなんて、最低だ。なめられてんだよ日本が」

真知（語り）「私もそう思った。でも、私を震わせたものは、一体何なんだろう。その時は深く考えなかった。それから、半年ほど経って、私は、もう一人のジークに出会った」

○教室

SE 喧騒。

教師「暑いなあ、よし特別許可だ。女子だけ、制服脱いでいいぞ」

女子達「エッチ」

真知「私、脱ぎます」

どつと喚声があがる。

教師「有り難う、吉田。だけど、俺は子供に興味はないんだ」

また、喚声があがる。「俺はあるぞ」の

男子生徒の声。

女子生徒「あっ、蜂だ」

騒然とする教室

教師「落ち着け。じっとしていれば蜂は刺さないから。ほら捕まえた。手の中で動いているよ」

男子生徒「殺せ。水攻めだ。火焙りだ」

教師「言うことが殺伐とされているなあ」

男子生徒「先生、こいつSMファンなんです」

教師「何いつてるんだ馬鹿、俺はロリコンだ」

「それじゃ吉田の立場はどうなるんだ」

の声。

SE 教師が窓に近づく音。窓を開ける音。

教師「とにかく、逃がしてやろう。蜂だって、一生

懸命生きているんだ。蜂さん行ってらっしゃい」

女子生徒1「飛んでいった」

女子生徒2「行け行けハッチ」

女子生徒1「みなしごハッチ」

教師「お母さんに会えるかしら」

「あああ」のため息と共に、しらけて、

教室が静まりかえる。

教師「あれ、暑いのに、運動場で走っている奴がいる。誰だあいつ」

男子生徒「6組の治です」

教師「宮地修か？」

女子生徒「（歌う）あなたのために、」

男子生徒「あーあ、もう馬鹿らしくてやってられない。

い。先生、図書室で自習して来ていいですか」

教師「ああいいよ。ところでここは何組だっけ？」

男子生徒「6組です」

教師「それじゃ、あいつはこのクラスの生徒か」

男子生徒「野球部なんてなくしちまえばいいんだよ。

万年一回戦。練習場所もサッカーにとられてよ

う」

真知（語り）「治とは、小学校、中学校が一緒だっ

た。訳もないのに、髪の毛を引っ張られたり、頭

を叩かれたりした。中学になると、いじめは終わ

ったが、徹底的に私を無視した。卒業して、ほっ

としていたら、目の前に座っていた」

○下校

SE 生徒達のざわめき。

久美子「真知、進路、決めた？」

真知「看護学校にしようかなあ」

久美子「白衣の天使やね」

真知「動機がちょっと不純かなあ。全寮制で、自分

の部屋が欲しい。親に言ったら……」

久美子「なんて？」

真知「両手、両足あげて賛成。学費は安いし、家が

広くなる。あんまり喜ばれると、ちょっとね」

久美子「いららない子かと思ってしまいか」

真知「久美子はどうするの」

久美子「私は決まってるの。何処でもいいから、短

大出て、主婦になんの」

真知「主婦かあ、相手が見つかればいいね」

久美子「こら」

○ポータライナー三宮駅ホーム

SE 駅のアナウンス。ポータライナーが

動き始める。

真知（語り）「運転手も車掌もない電車。カッタ

ン、コットンとビルの間を縫うように走る。おも
ちやの電車のようだ」

ポートルライナーの走る音が続く。

真知（語り）「私はこの人工の島で育った。父の仕
事関係で、島が完成する前にここへ移ってきたの
だ。親父は「この島をつくったのは俺だ」と酒に
酔えば叫ぶ。親父によれば、道路もビルも橋も造
ったらしい。ついでに私もつくった。あへっ」

○ポートルライナー市民病院前駅

SE ポートルライナーの停まる音。「市民
病院前」のアナウンス。改札を通る人々
の足音。

○家へ道（夕方）

SE 風の音。遠くで船の汽笛の音がする。

真知「治……」

SE ボールを投げる音。壁にはねる音。

真知（語り）「また、治がボール投げをしている。

学校では、授業中にランニング、家に帰れば、壁を相手にボール投げ、暗いなあ」

○吉田家・キッチン（夕方）

真知「只今」

母「お帰り」

亘がコーラスの練習をしている。時々音程がはずれる。

真知「今日は何？」

母「おでん」

真知「ラッキー」

母「（声を潜めて）蓋を開けとくとね」

真知「腐るよ」

二人、同時に笑う。亘の歌が、ピタリと止む。

○吉田家・居間（夕食）

亘「僕の玉子がない」

真知「ダイコンの下にあるじゃん」

亘「盗るなよ」

父「こら、食べ物のことでもめるな、浅ましい」

母「お父さんの玉子はこんにやくの下」

父「えらい小さいなあ」

母「うずらの卵」

父「（叫ぶ）殺すぞ、何で俺だけがうずらなんだ」

母「カロリーオーバー。あつ、私のを盗るな」

真知「（呆れたように）浅ましーい」

SE テレビの音。

母「東さんところ、真知と同じクラスだね」

真知「うん、治。：：東君。どうしたの」

母「子供に言う話じゃないなあ」

真知「子供じゃないよ」

母「男出入りが激しいって」

父「母子家庭だったなあ」

母「そうよ」

父「事情があるんだよ」

母「それがね、商売にしているんじゃないかって」

父「まさか」

母「（少し離れて）自治会で問題になってるんだって」

真知「ごちそうさま」

SE 真知の立ち上がる音。

真知（語り）「治の家は、私の家の3つ上だ。同じ間取りだと思う」

SE 食器を洗う音。水を止める。ボールを投げる音。壁にはねる音。

○吉田家・居間（朝）・回想

SE ドアを叩く音。

母「真知、早くしなさい。治ちゃんが来たよ」

真知（子供）「はぁーい」

母「治ちゃん、ちよつと待ってね」

真知（語り）「インターホーンに手が届かないから、ドアを叩く」

治（子供）「真知ちゃん、学校、行こう」

真知（語り）「何時からかなあ、来なくなったのは。」

ちよつと淋しかった」

○高校・校門（朝）・7月中旬

登校してくる生徒達のざわめき。蟬の声
が混じる。YAH YAH YAH／夢の番人（CHAG
E & ASKA）「作詞・作曲…飛鳥涼」を見
事にハモリながら登校して行く、真知と
久美子。

久美子「もうすぐ夏休み」

真知「ああ、暇をもてあますなあ」

久美子「勉強しなくちゃ」

真知「おっ、言ったな」

久美子「今日もカポネがいる」

真知「（笑いながら）怖いね」

久美子「やくざも挨拶して通る面構え」

真知「迫力あるもんねえ。誰も英語の先生なんて思
わないもん」

カポネ「おはよう、みんな元気か。お前、スカート
が短いぞ。もっと短くしろ。お前、ピアスをして

るのか。明日から鼻にしろ」

SE 校門抜ける足音。

真知「鼻ピアスってありかもしれないね」

久美子「舌ピアスは？」

真知「痛そう、あれ」

久美子「何のポスター」

真知「高校野球、兵庫県予選だって。応援に来てね
だって」

久美子「また1回戦敗退ワールドゲームよ。それに
下手な字。ワープロでつくればいいのに」

真知「（独り言のように）今年で終わりなんだ」

久美子「えっ、真知、行くの？」

真知「行かないよ。久美子は？」

久美子「行かない、行かない、多分誰も行かないよ。

今年は応援団も中止だって」

真知（語り）「その日も、治は1人でグラウンドを走
っていた」

○ポーターライナー・三宮駅ホーム

SE 駅のアナウンス。雑踏。

真知（語り） 「治がいた。離れようとする、ついできた」

治 「オッス」

真知 「（小さく）オッス」

SE ポートライナーのドアが開く音。

乗り込む足音。車内放送。ゆっくり動き始める。

治 「7月14日、西宮球場、午後1時プレーボール」

真知 「行かない。応援団も中止だから、授業もあるし」

治 「そうか」

真知 「ごめん」

SE ポートライナーの停まる音。中公園駅の内アナウンス。

真知 「ここで降りるの？」

治 「夕日を見に行く」

真知 「夕日？」

治 「ああ」

SE ドアーの閉まる音。ポータライナー
が動き出す。ブリッジ音楽。

○西宮球場

SE 応援団の音。球場の音。通路を歩く
音。

真知「暑い」

カポネ「（遠くから）おい」

真知（語り）「カポネがいる。3 塁側はカポネだけ
だ。見事に、他は誰もいない。いや、隅っこで、
犬が 1 匹、舌を出してグラウンドを眺めている」

SE 応援団の音。

真知（語り）「あっちはにぎやかだ」

応援団長「フレー、フレー北高」

観客「（手拍子）フレ、フレ、北高」

真知「こんにちは」

カポネ「おっ、1 人でおいじょうしてまんねん。ア

イスキャンデイ、食べるか」

真知「いえ、」

カポネ「2本も食べたなら、屁が出そうや」

真知「すいません。いただきます」

SE 袋を破る音。

真知「これが屁の元ですか？」

カポネ「へえー」

二人、声を揃えて笑う。カポネが立ち上がる。
がる。

カポネ「フレー、フレー南」

真知「（手拍子）フレ、フレ、南、フレ、フレ、

南」

真知（語り）「授業をサボってきたのに、カポネは

何も言わない。あつ、昼から、英語があつた。こ

いつ、職場放棄だ」

カポネ「グビ、旨い、飲むか？」

真知「いいです」

カポネ「旨いぞ」

真知「未成年です」

真知（語り）「と言いながら、1本もらった」

SE 犬の鳴き声。「ワン」

カポネ「ツー」

真知「おっ、来たか」

カポネ「ツー」

真知（語り）「相手にしない。仕方がないから、自分で言っ、自分で笑っている。幸せな奴。ヤクザと美少女かあ」

SE 犬の鳴き声。「ワン」

真知（語り）「お前もいたね。ヤクザと犬と美少女」

SE 試合開始を告げるサイレンの音。

カポネ「赤堀、腕が振れてないぞー。赤堀、打たれる。赤堀、お前でべそだろう」

真知「先生、北高の青堀君に遺恨でもあるのですか？」

カポネ「赤堀、1億円だぜ、あいつ」

真知「1億円！」

SE ボールが、ミットに収まる音。

真知（語り）「面白いほど、バットがくるくる回る。よく見ていたら、ボールがミットに収まってから、バットを振っている」

審判「ストライク」

真知（語り）「赤堀君は、人差し指と中指でピュ
とボールを切るように投げる。半分ぐらいの力で
投げているのだろう。全て直球だ。赤堀君へのヤ
ジにも疲れて、缶ビールを半ダース空けたカポネ
は眠ってしまった」

SE カポネの大きないびき。

真知「あああ、天下太平だ」

犬「ワン」

真知「お前、首輪をしていないな。野良犬か、ビー
ルを飲む。おっ、飲みっぷりがいいなあ」

犬「ワン」

真知（語り）「治はサード。近くなのに、私の方を
全く見ようとしない」

治「行こうぜ、行こうぜ、しまつて、行こうぜ、行
こうぜ」

SE バットが球を弾く快音。一段と大き
く上がる観衆の声。バットが球を弾く快
音が続く。選手が走る音。審判の「セー
フ」の声。

真知「何時になったら終わるのかなあ」

審判の「アウト」の声。

真知「やっと終わった。7点も入った。今年もワールドゲーム確定」

場内アナウンス「6番サード、東君」

審判「ストラックアウト」

真知（語り）「あえなく三振。1球もボールにかすらなかった。気がつくのと、犬も眠っていた。観客は私1人になった。鳩が数羽バックネットから飛び出した。真っ青な空に、羽ばたき、小さくなつて、消えた。私はこんなところで何をしているのだろう」

SE 球場のざわめきが消え。ボールを投げる音。壁にはねる音が続く。球場のざわめきが戻ってくる。

真知（語り）「2回にはなんと10点入った。17対0。赤堀君、左で投げたら。3回に5点入り、22対0。それとノーヒットノーラン。北高の応援団も静かになった。赤堀君は真剣に投げ始めた。投げた後、1球1球、首を振ったり、満足そうに頷いたり、練習をしているのだ。私はなぜか悲し

くなくなった。席を立とうとした時」

治「行こうぜ、行こうぜ、しまつて、行こうぜ、行こうぜ」

SE バットが球を弾く快音。

真知（語り）「打球が3塁線を襲った。治が飛びついた」

3塁審判「フェア」

真知（語り）「治が、跳ねるように立ち上がった」

治「ファールや」

球場全体が静まりかえる。

治「ファールや」

真知（語り）「次の瞬間、誰もが言葉を失った。治が審判の胸を突いたのだ。尻餅をついた審判は、何が起こったのか理解できずにぼかーんと口を開けている」

SE どよめきが起こる。次に怒声が飛び交う。

声「退場だ、恥さらし」

声「それでも高校生か」

声「退学だ」

真知（語り）「治がすごく孤独に見えた。誰もいない荒野で、ひとりぼっちだった。帽子を取り、頭を下げ、3 星のポジションに戻った治に、審判が迫った。ユニフォームの袖を引つ張った」

3 星審判「た、た、退場」

真知（語り）「いつの間にかカポネは起きていた。涼しそうな目をグラランドに向けていた。何も、言わなかった。（間）涙が一筋、私のほおを伝った」

○吉田家・居間（夕方）

SE ギターの音が聞こえてくる。

真知「只今」

母「お帰り」

真知「誰が弾いているの？ 亘？」

母「そう、先輩からもらったんだって」

真知「ふーん」

母「（声を潜める）コーラスよりいいね」

真知「うん」

母「弦が1本切れているんだって」

真知「そういえば、ちよっと変かなあ」

SE 襖を開ける音。ギターの音が止む。

真知「亘、弦を買いなよ」

亘「いいよ」

真知「お姉ちゃんが買ってやろうか」

亘「いいって。この方が弾きやすいよ」

真知「変なの」

亘「弦のないところは、音がないところなんだ」

真知「音がない？」

亘「風のように、あるんだけど、ないんだ」

真知「見えないってこと」

亘「まあ、そうだね」

真知「風は見えるよ、木の葉は動くし、雲は流れる」
亘がギターを弾き始める。

真知「（歌う）」

風が見えるよ、

木の葉は動く、雲は流れる、

チヨウは風に乗って、花を探しに行く。

風が見えるよ、

髪は揺れる、波は寄せる、

私は風に乗って、夢を探しに行く」

SE ギターの音が続く。少しずつ小さくなり、消える。

○吉田家・真知の部屋（夜）

真知（語り） 「家族三人は眠ってしまった。眠れぬ夜にまた安部公房を読む。「箱男」。残り少なくなつたページを繰る。

時計の文字盤は片減りする。

一番減っているのは8の字あたり。

……。

平らな時計を持っているものがいたら、それはスタートしそこなつた1周おくれの彼。

1周おくれの彼……。

SE ボールを投げる音。壁にはねる音が続く。離れて、治の「ファールや」とい

う叫びが入る。

真知（語り） 「平らな時計はどんな時を刻んでいる
のだろうか？」

SE 窓を開ける音。

真知（語り） 「窓を開けると、少し涼しい風が舞い
込む。三宮の夜景が海の向こうに美しく浮かんで
いる。いつも見ている風景がなぜか蜃気楼のよう
に見える。あそこにも沢山の人が生きているんだ
なあ」

SE 窓を閉める音。

真知（語り） 「だからいつも世界は

一周進みすぎている

彼が見ているつもりになっているのは

まだ始まっててもいない世界

幻の時

針は文字盤に垂直に立ち

開幕のベルも聞かずに

劇は終わった

○ J R 三宮駅ホーム

高校生の話し声。

真知（語り）「また、季節が移った。あまり影響のなかった台風が1つ来て、急に秋めいた季節になった」

SE 駅の雑踏。

久美子「勉強している？」

真知「まあね。おしりに火がついてきたからね」

久美子「白衣の魔女」

真知「こらあ」

SE エスカレーターを上げる音。

真知「久美子は？」

久美子「短大に決めた。婚期を逃したくないから」

真知「そうか」

久美子「子供を産んで、育てて、ちよつと余裕が出

来たら、旅行に行きたいなあ」

真知「卒業旅行を考えようか」

久美子「そうだね。何処がいいかなあ」

真知「雪が見たいなあ」

久美子「雪かあ。（間）寄っていく」

真知「うん」

○ハンバーガー店内

ハンバーガー店の店員の声。

久美子「グラタンコロツケバーガーとイチゴシエイ
ク」

真知「私は、チーズバーガーとオレンジジュース」

SE 椅子を引く音。二人が腰掛ける音。

店内の喧噪。

久美子「東君、学校に来ないね」

真知「どうしたの？ 急に」

久美子「真知が、時々、東君の席を見ているから」

真知（語り）「あの日から、治は学校に来ていない。

忘れられた治の机。誰の話題に上がらない。高校

3年生。みんな自分のことで忙しいのだ」

久美子「職員会議では、退学処分かどうかは12対

12で決まらなかったんだって」

真知「ふーん」

久美子「カポネが欠席していて、あいつ次第になっ

た」

真知「カポネはどつちに」

久美子「東が決める事だと言った」

真知「治が決める事……」

久美子「人の人生、他人が決めちゃいけないって。

ちよつとずれてるね」

SE シェイクを飲む音。店員の「いらっ

しゃいませ。こんにちは」の声。

久美子「カポネの事、他の先生はみんな馬鹿鹿って

言っていた。結局、12対12のまんま。夏休み

が済んだら、みんな冷めちゃって」

真知（語り）「忘れられた治の机」

SE ボールを投げる音。壁にはねる音が

続く。離れて、治の「ファールや」とい

う叫びが入る。

○JR三宮駅付近

SE デパートへの陸橋。

久美子「それじゃ」

真知「また、明日」

SE 階段を上がる足音。

真知（語り）「陸橋を上がり、ポータライナーの駅
に向かう。あれ、橋の上で鈴虫を売っている」

SE 近づいていく足音。

真知「（驚き）東君、こんなところで何をしている
の」

治「吉田か。留守番を頼まれたんだ」

真知「留守番？」

治「ちよっと見といてくれって。知らないおじいさ
んに」

真知「ふーん」

治「トイレかなんかだろう」

真知「鈴虫、鳴かないね」

治「鳴かないよ。1時間もいるけど」

真知「そう、1時間も。だから留守番を頼まれたん
だ」

治「うん。見ろよ、かわいいだろ」

真知「かわいい。なすびを食べてる」

治「500円、買わないか。この鈴虫の飼い方って

本をつけるよ」

おじいさん「おい、おい、商売はいいよ」

治「客は誰も来なかった」

おじいさん「そうか、面倒だからな鈴虫は」

真知「面倒なの？」

おじいさん「丁寧に飼わなきゃ、死んじゃったり、

共食いをしたりする」

治「共食い」

おじいさん「生きるためだよ」

SE 雑踏。携帯電話の音が混じる。車の音。

おじいさん「雌は土の中に卵を産み付ける、雄はこれからは一頻り鳴いて、次々死んでいく。雄は雌に食われるんだよ。10月の中頃になると最後の1匹がのこる。それは、雌だよ」

真知「土の中に卵があるの？」

おじいさん「まだ少しだけあるよ。よく見てごらん。これだ」

真知「小さい命」

おじいさん「そうだ、小さい命だ。小さな命が来年

に孵る。また、同じことが繰り返されるんだよ」

真知「（弾んだ声で）でも、1つ1つが新しい命だよね」

SE 音楽。

おじいさん「お嬢さん1つもって帰るか」

真知「えっ。お金払います」

治「この鈴虫の飼い方って本をつけるよ」

おじいさん「こらっ」

三人が、声を揃えて笑う。

○ポーターライナー。

SE エスカレーター音の音。

真知「何をしているの？」

治「バイト」

真知「なんの？」

治「大阪で、寿司屋のバイト。一応高校生だから、

昼間だけ」

真知「いいなあ、お寿司が食べられて」

治「バーカ、商売もんだぜ、食べられないよ」

SE 駅のアナウンス。出発を知らせるべ
ルの音。

治「早く、真知」

真知「間に合うかなあ、駆け込みはダメだよ、治」

SE 足音が停まる。ポータライナーが出
ていく音。

真知「間に合わなかった」

治「タッチ、アウト」

○ポータライナー。

SE ポータライナーの車内。

真知（語り）「治は何も喋らない。窓の外を眺めて
いる。私も鈴虫の籠を眺めている。羽がとても美
しい」

SE 「中公園駅」の車内アナウンス。

真知「降りるの？」

治「ああ」

真知「夕日を見に？」

治「ああ」

真知「私も行こうかなあ」

治「1人で行く。女とチャラチャラするのは嫌だ」

真知「チャラチャラ。（乗客を意識して声を潜める）そんなつもりはないもん。なんだと思ってるの、馬鹿」

治「鈴虫を頼むよ」

真知「えっ。いいよ」

治「お前んちのベランダに置いたら、俺ところからも聞こえるかもしれないね」

SE 電車の扉の開く音。

真知「じゃ」

治「ああ」

真知（語り）「治は、走るように改札を抜けて行く。

その向こうに、夕日が落ち行く。何時か一緒に見ようよと、その背中に囁いた」

○吉田家・居間（夕方）

父「鈴虫か。珍しいなあ」

母「鳴かないね」

真知「鳴かないね」

父「昔は、かめの中で飼ったんだよ」

真知「かめって？」

父「かめを知らない……。かめへん」

母「時代劇でさあ、侍が柄杓で水を飲むだろ。その

水やお酒が入っている陶器の容器だよ」

父「俺のギャグの反応はどうなってるんだ」

真知「かめか……。そんなのないよねえ」

父「あもう、かめへんは」

母「そうだ、熱帯魚の水槽があったね」

真知「うん」

父「(きれて)ビール」

母「はい、はい」

SE 母の立ち上がる音。

真知「亘が、サーモスタットの設定を間違って」

母「(離れて)そう、そう、そう、エンジェルフィッシュの

煮魚をつくっちゃった」

真知と母が声を合わせて笑う。

SE 亘の立ち上がる音。

父「亘……。お前、いたのか」

SE 襖をピシヤリと閉める音。

母「また、傷つけちゃった。感じやすい子なんだから」

真知「誰に似たんだろう」

母「お父さんじゃないよね」

真知「うん」

母「（真剣に）誰だろう」

父「お前、何を考えてるんだ」

SE 亘の部屋から、ギターの音が流れて

くる。テーマ曲「風が見える」

風が見えるよ、

木の葉は動く、雲は流れる、

チヨウは風に乗って、花を探しに行く。

風が見えるよ、

髪は揺れる、波は寄せる、

私は風に乗って、夢を探しに行く

ラ、ラ、ラ、私は風になる

ラ、ラ、ラ、私は夢を探しに行く

○吉田家・真知の部屋（夜）

亘「コオロギみたいだ」

真知「昔、おじいちゃん所の庭に、コオロギが鳴いていたね」

亘「スイーチョンもいた」

SE コオロギ、ハヤシノウマオイ等の虫の声。

真知「ここには土がないもんねえ」

亘「これでいい」

真知「ありがとう。鈴虫君、お家が広がってよかったね。よいしょと」

SE 真知が立ち上がる音。

亘「何処へ持っていくの？」

真知「ベランダ。戸を開けて」

亘「うん」

SE ベランダへの戸を開ける音。

真知「よいしょと」

SE ベランダへに水槽を置く音。

真知「星がきれい。土がなくても、空があるか」

亘「ねえちゃん」

真知「何？」

亘「流れ星、見た事ある？」

真知「ないなあ」

亘「俺もない」

真知「ここにいるって、不思議だと思わない？」

亘「不思議だと思う」

真知「こうして星を見ている私って、何なんだろう

う？」

亘「生きているって、怖いね」

真知「うん、怖いね」

亘「あっ、流れた」

真知「えっ」

亘「消えたよ」

真知「ずるい、亘」

亘「しっー」

SE 鈴虫の鳴き声。

真知「鳴いてる」

亘「うん」

SE 鈴虫の鳴き声が少しずつ大きくなる。

真知「かわいいねえ」

亘「うん」

真知「聞こえるかなあ」

亘「えっ」

真知「何でもない」

SE 鈴虫の鳴き声が少しずつ小さくなる。

真知（語り）「次の日、ポータライナーを1台見送った。その次の日は2台。「鈴虫の声、聞こえた？」って聞きたかったから。その次の日は3台

○ポータライナー・三宮駅ホーム

SE 駅のアナウンス。雑踏。電車が出て

いく音。

真知（語り）「8台目か……」

SE 側を通り過ぎる足音。

真知「細胞の構造。核、ミトコンドリア、うむうむ。

ああ、眠くなってきた。もう一台で帰ろう。窓の明かりが、夕日の色に染まっていく。もう日が落

ちるなあ」

SE 近づいてくる足音。止まる。

治「よお」

真知「なあんだ東君か」

治「誰か待ってたの」

真知「ううん」

治「それじゃ」

真知「待って、私も帰るから」

SE 真知が急いで立ち上がる音。本が落

ちる。急いで拾う音。電車が入ってくる

音。

治「どうしたの？」

真知「別に」

SE 電車が入ってくる音。

治「先輩が、巻きずしを持って帰れって」

真知「ふーん」

SE 電車のドアが開く音。

治「一緒に食べようか」

真知「（声を弾ませる）夕日を見ながら」

治「ああ」

真知「いいの、チャラチャラは」

治「チャラチャラ……。いいよ。俺、野球のお礼、
言っていないもん」

SE 電車のドアが閉まる音。ポートル

イナーが動き始める。

真知「鈴虫の声、聞こえた」

治「ずーと耳を澄ませていたんだけど、聞こえな
かった」

真知「そう」

治「どんな声」

真知「上手くないけど。りーん、りーん、りーん」

SE 真知の声が遠のき、鈴虫の鳴き声が

電車の音に混じって聞こえてくる。

治「聞こえる。うん、聞こえる」

真知「よかった」

○ポートルアイランド・北公園への道

SE 風の音。車の音。

治「走ろうか。もうすぐ日が落ちるよ」

真知「うん」

SE 走り出す音。次第に二人の息が荒くなる。

真知（語り）「歩道橋を降りる。夕日が光の道をつくった。光の中を走る。いつの間にか手をつないで、子供のように光の中を走る。私たちも光っているのだ。きつと」

○ポートアイランド・北公園

二人とも、荒い息をする。

治「間に合った」

真知「きれい」

治「海に光の道が出来る」

真知「歩いてみたい」

治「歩くのは無理だ」

真知「それじゃ、泳いで行く。光の中をお魚のよう
に」

治「クロールで」

真知「光る水の中を」

SE 波の音。船が通る音。神戸大橋を通る車の音が混じる。

治「突堤の先まで行こうか」

真知「うん」

SE 走る音。音楽。

真知「風が気持ちいい」

治「ああ、気持ちいい」

真知「風が私たちを包んでいる」

治「俺達、風の中にいるんだ」

SE 足音が止まる。

真知「これから先は海」

治「（笑う）突き当たり」

SE 波の音。海鳥の声。

治「（声が震える）キスしていいか」

真知「そんな事聞くなよ、馬鹿」

SE 風の音。波の音。海鳥の声。

真知（語り）「軽く唇が触れた。私のファーストキッス。体が震えた。治はくるりと背を向けた。そして、ポケットからボールを取り出して、夕日に向かって、ゆっくりと振りかぶった。そして、投

げた。ボールは美しい放物線を描き、夕日に吸い込まれるように、ふっと、消えた」

○ポートアイランド・北公園・イルカの噴水

真知「イルカの噴水。中学生の頃は、よく遊びに来たなあ。イルカが泳ぎ回っているみたいで飽きないもん」

SE 噴水の音が大きくなる。イルカの鳴き声。
き声。

治「耳を澄ませば、イルカの鳴き声が聞こえるよ」

SE 噴水の音。

真知「ピーピーって」

治「それ、イルカの鳴き声だよ」

真知「そうかなあ」

治「イルカは何頭いるか」

真知「（笑う）それギャグ？」

SE 噴水の音が小さくなる。

真知（語り）「会話が途絶えて、ふと、神戸大橋を見上げた時、治もその方向に目をやりながら、ぼ

つりと言った」

治「俺、住み込みで働く事にしたよ」

真知「大阪へ行くの」

治「ああ、グルメ相手じゃない寿司を握りたい。偉

そうだけど」

真知「……」

治「子供やおじいさんやおばあさんも気楽に入れる
寿司屋がいいよ。廻り寿司じゃなくて、1人1人
の顔を見て握るんだ」

真知「楽しそうだね」

SE 噴水の音がまた、大きくなる。

真知「お母さんはどうするの」

治「家は移るけど、何処に行くのか知らない。あの
人は強いから」

真知「あの人……」

SE 風の音。

真知「私はグルメじゃないから、食べに行くね」

治「海老一丁」

真知「おっ、きたか。ウニ、トロ、赤貝」

治「よっしゃ、ウニ、トロ、赤貝」

真知「旨いねえ」

治「あつたり前よ」

SE 笑い声と、はしゃぐ二人の声が段々

と遠くなる。二人の立ち上がる音。

治「橋を渡って帰ろうか」

真知「うん」

治「あつ、巻きずし、忘れてた。半分食べなよ」

真知「すごい、切っていないんだ。よおーし、かぶり

つくしかない」

治「1、2、の3」

真知「おいしい！」

治「うまい！」

○ポートアイランド・神戸大橋

SE 車の行き交う音。

治「吉田はどうするんだ」

真知「看護婦になる」

治「看護婦さんか。いいと思うよ」

SE 橋の欄干に進む足音。

真知「三宮の夜景がきれい」

治「いいなあ、神戸は。何時か帰ってきたい」

真知「帰ってくるよ。きっと」

治「ああ」

真知（語り）「4ヶ月後、あの美しい神戸にあんな

悲惨な事が起こるとは、夢にも思わなかった」

○吉田家・ベランダ（夜）

SE 小さな鈴虫の声。

真知（語り）「10月に入ると鈴虫は次々と死んで

いった。雌に食べられて、雄は1匹だけになった。

それでも、けなげに鳴き続けた」

母「真知、ごはんよ」

真知「はい」

○吉田家・居間（夜）

SE 襖を開けて真知が入ってくる音。

母「東さんところ、引っ越しって行ったよ」

真知「そう」

母「奥さんだけだった。男の子はどうしたんだろ
うね」

真知「知らない」

○吉田家・ベランダ（夜）

真知（語り）「10月の中頃は雌が一匹だけ残った。

ほとんど動かない。死んでいるのかと思うと長い
触覚がかすかに動く。まるで何かを深く考えてい
るようだ」

亘「鳴かなくなったね」

真知「雌が一匹いるだけ。みんな死んだ」

亘「はかないね」

真知「うん」

亘「来年になると、代わりの鈴虫が生まれるんだね。

僕も誰かの代わりかなあ」

真知「私は誰の代わりだろう」

亘「また、流れ星が見えた」

真知「お前にはよく見えるね。飛行機だろ」

亘「飛行機じゃないって。ずっと流れて消えるんだ」

真知「ずっと流れて、消える」

○吉田家・真知の部屋（深夜）

真知（語り）「パタパタと秋が過ぎ、冬がやってきて、年が明けた。もうすぐ入試。運命の時か」

SE 窓を開ける音。風の音。

真知（語り）「おおっ、寒。三宮のネオンも少なくなつた。3時半か。あいつどうしているんだろうなあ。ボールと一緒に、野球も、恋も、みんな海へ投げたんだろうか。勝手だなあ、男って。よし、もうちよっと頑張ろう」

○吉田家・真知の部屋（深夜）・うたた寝・夢

真知「イカ、マグロ、タマゴ、タコ」

治「へい、イカ」

真知「あと、エビにシヤコ」

治「へい、マグロ、タマゴ、タコ」

真知「治、食べようとしたらお寿司が消えてしま
よ」

○吉田家・真知の部屋（午前5時46分）

神戸淡路大震災。

真知（語り）「何かざわざわという音がして、突然、
私の体は真っ直ぐ落ちた」

SE 地鳴り。激しい揺れ。物が落ちる音。

真知「何、これ（叫ぶ）」

父「（叫ぶ）地震や」

真知「イヤ！」

父「揺り戻しが来るぞ。しっかりつかめ」

SE 激しい揺れ。物が落ちる音。割れる
音。

母「（叫ぶ）お父さん」

父「大丈夫、すぐにおさまる」

SE 音がおさまる。

父「動くな」

母「亘、大丈夫」

亘「大丈夫だよ」

父「けがはないか」

母・真知・亘「大丈夫」

父「夜が明けるまで、待とう」

亘が、突然泣き出す。

父「泣くな、男だろ」

亘「寒いよ」

母「毛布はないの」

亘「あった」

真知「温くなった？」

亘「うん」

真知（語り）「夜明けまで長かったけど、お父さんが、強烈なおならを一発ぶっ放したんで、みんな笑った。おならに救われたねって、お母さんが言った。夜が明けると、三宮にいくつも、白い煙が上がった。あそこで、大変な事が起こっているのだ」

○吉田家・ベランダ（昼）

真知（語り）「鈴虫の水槽は、木っ端みじんに壊れていた。それでも、ガラスの破片を集めようとして、ガラスで手を切った」

真知「あいた」

父「馬鹿、鈴虫なんか放っておけ」

真知（語り）「誰かが、自転車でやって来る。思い切り、自転車をこぎながら、こちら向かって、手を振っている。治だ！」

治「水、水を持ってきたよ」

真知「（叫ぶ）ありがとう、大丈夫よ」

音楽。

真知（語り）「あれから、もう、8年。治と会う事はなかった。何故か分からない。逢えば何かが壊れる。それが怖くて、すれ違っているのかもしれない。あそこで終わったのか。また、始まるのか。とにかく、あの時、ピリオドを1つ打った」

○ポートアイランド・北公園・イルカの噴水

SE 噴水の音が大きくなる。イルカの鳴き声。足音。

真知（語り）「私は看護婦になった。毎日が、これでいいのだろうかという連続だ。鈴虫は二度と鳴く事はなく、いつの間にか安部公房の本も読まなくなつた。ただ、自分で自分が嫌になつた時、あの夕日を見に行く」

○ポートアイランド・北公園・突堤

SE 波の音。船が通る音。神戸大橋を通る車の音が混じる。海鳥の声。足音。風の音が強くなる。足音が止まる。

真知（語り）「夕日の中に浮かび上がる治の姿は、猛然と審判を突き飛ばした彼だ」

SE 風の音。

真知（語り）「突然ジークのように」

音楽。テーマ曲。「風が見える」

風が見えるよ、

木の葉は動く、雲は流れる、

チヨウは風に乗って、花を探しに行く。

風が見えるよ、

髪は揺れる、波は寄せる、

私は風に乗って、夢を探しに行く

ラ、ラ、ラ、私は風になる

ラ、ラ、ラ、私は夢を探しに行く

了

引用 安部公房 「飛ぶ男」 「密会」 「箱男」

作成日…2005年6月18日（土）

